「弁証法講座」
中央労働学院　東京都港区南麻布 2-8-18

講師レジュメ----------

1978 年 4 月開講　土曜講座
「弁証法講座」講義要綱
講師　許萬元（ホ　マンウオン）
本講義のテーマは、弁証法をできあがった公式として説明することにあるのではなく、むしろ弁証法の本質の問題を理解することにある。そのため、この講義では、ヘーゲル、マルクス、エンゲルス、レーニンにおける弁証法の理論的発展の問題が主要な検討の対象となろう。
〈第 1 回目〉は、序論的な部分として、「弁証法・いかに把握すべきか」についてお話したい。
〈第 2 回～4 回〉ここでは、現代的な意味での弁証法の創始者であるヘーゲル弁証法の本質について検討する。その順序は次の通りである。
①ヘーゲル弁証法の三大要素
②ヘーゲル弁証法の汎神論的構造
③ヘーゲル弁証法の主体的根拠
〈第 5 回～7 回〉ここでは、ヘーゲル弁証法の唯物論的転倒の問題が検討される。
①実践的唯物論の弁証法的意義
②エンゲルスの弁証法の特徴
③マルクスによる学としての弁証法の確立の問題
〈第 8 回～9 回〉ここでは、唯物弁証法におけるレーニン的段階の問題が検討される。
①『唯物論と経験批判論』におけるレーニンの問題提起
②『哲学ノート』におけるレーニンの問題提起
〈第 10 回～12 回〉ここでは、以上の弁証法の本質論を前提にして、今日問題となっておるいる弁証法の諸問題について検討していく。
①矛盾の弁証法的理解
②否定の否定の法則とは何か
③マルクスの上向法の弁証法の問題
以上の講義によって、受講者みずから、弁証法の諸問題を正しく理解し解決しうるための理論的拠点を身につけることができるならば、というのが、講師の最終的な狙いである。

（以下は多田ノート）

----------第１回----------

著書　「ヘーゲルにおける現実性と概念的把握の論理」大月書店
　　「ヘーゲル弁証法の本質」青木書店
　　「講座　マルクス主義研究入門」のなかの「弁証法」青木書店
　　「認識としての弁証法」青木書店

弁証法とは何か
　なぜ学ぶのか
　いかに学ぶのか

労働―手の役割
思考―手の役割
　　体で覚えたものは忘れない
　　単語を覚えるにも手を使った方が忘れにくい
　　「書きながら考える、考えながら書く」三木清
　　頭と手の結びつきは、科学者によって立証されている

高校までは与えられた教科書が大きな役割を担う
高校卒業後は、ノートとペンが重要な役割を担う
書く習慣をつけるかつけないかが、人生において決定的な役割をもつ
どんな名著も自分にとっては参考書である

弁証法の対象とは何か
弁証法とは何か
　自然、社会、人間の思考（⇒世界）を貫く最も一般的な発展法則の学
　（外的世界）
　たんなる法則ではなく、法則に関する学である
　一般法則―あるのかないのか―実在性の問題
　　↓
　　世界ははたして統一原理があるかどうか
　　（共通な実体）

哲学の大前提　　深さ＝広さ
　　深い本質へ行けば行くほど、その妥当するものの範囲は拡大する
　　根本的な実体→統一した世界
　　↓→物質

哲学の元祖　「タレス」

　　実体は水である

　　世界の一般法則は水の法則である（気体、液体、固体）

哲学―世界を全体として把握しようとする----------←

弁証法―哲学の理想を実現した真理　　↑

　　↓→----------↑

【神】（主観的なものを原理としている）

（唯物論）　　↕

【客】----------【主】（観念論）

（物質）　　どちらを実体におくか

神―人間観が対象化されている

神は信仰の対象である―信仰的人間が絶対化されている

　　信仰的人間の立場が神に移されている

神は芸術の対象である―芸術的人間が絶対化されている

　　芸術的人間の立場が神に移されている

神は理性の対象である―理性的人間が絶対化されている

　　理性的人間の立場が神に移されている

物質が先か、観念が先か

社会は人間の思想を変えれば良くなるのか→教育を変えれば良い

社会の土台を物質的に変える→唯物論の立場

「問題が複雑になればなるほど原則に戻れ！」

複雑な問題を単純な問題に還元する―哲学の問題

唯物論----------観念論

　　人間的なものを何らかの形で原理とする

哲学史には唯物論はあまり現れない

唯物論は社会の変革期にいつも現れる

その他の時は支配階級のイデオロギーである観念論が哲学の歴史をつくってきた

神学の否定を神を持ちだして行う

唯物論←→観念論　　観念論が唯物論の立場を包み込むようになる

↓発展　　↓発展　　→ヘーゲルの観念論

総体性　　総体性＝体系的な全体（部分をよせ集めたものではない）

ヘーゲルの哲学→汎神論

神学の歴史　①一神論-----一つの神、統一、多様なものが説明できない

②多神論----様々な特殊性を説明する。統一がない

③汎神論----一神論と多神論の統一

「神即自然」スピノザ

すべての神は一つの神の現れである

自然は神の現れである

「自然こそ神である」フォイエルバッハ

自然を神の位置に高める

「ヘーゲルは神学的唯物論である」---フォイエルバッハ

（汎神論）

ヘーゲルの唯物論は逆立ちしている

観念論の形をとっているが唯物論の中味を包み込んでいる

唯物論と観念論を一面的にとらえてはならない

唯物論と観念論を相対性でとらえる

ヘーゲル以前の唯物論者よりもヘーゲルの方が唯物論的である

愚かな唯物論者よりも聡明な観念論の方が唯物論的

マルクス

今までの唯物論-----主体性の原理がなかった

（フォイエルバッハも含めて）↙

観念論の原理が唯物論の中へ含まれる

ヘーゲルの相対的唯物論が、唯物論の中へ止揚される。

（観念論の立脚の余地がない）

マルクス以降観念論としての観念論の立場はない。

（実存主義等のものはあるが）

（物）-----（意識）

↑

現代唯物論は意識を観念論以上に重要視する

意識は物質的基礎があってはじめて成り立つ

廃除すべき観念は、基礎を変えれば廃除できる

<u>否定するのは「観念的なものが根源的である」という命題である</u>

歴史的なものは論理的である----我々の認識の中に現れてくる

ある人が会議にでなかった-----彼は誠意がない-----観念論

どのような理由があるのか---唯物論

唯物論と観念論の対立は、現在において、認識において、再生産される可能性がある
(歴史的には解決されているが)
頭のいい人間は問題を解決できるようにもっていく
頭の悪い人間は問題を困難にしてしまう

唯物論----科学と手をたずさえて進んできた
神を否定して神学と闘ってきた
科学者は唯物論者ではない
科学----主観を排除して物事を客観的にとらえる（素朴唯物論、自然発生的唯物論）
一般法則---物質---統一原理
全自然史の統一をなしとげた原理
存在論的概念
認識論的概念
エンゲルス----意識も物質の属性として、物質の中に含まれる
物質の存在形態は運動である
↓
物質の法則

一般法則は常に方法となる
ニュートン力学は力学的に見る方法となる

真の方法は客観的な一般法則でなければならない
唯物論弁証法----客観的な一般法則として真の方法となる

方法の問題の獲得
↓→世界観を含む

弁証法----物事をありのままに見る
どうすればありのままに見られるか
弁証法を無視してありのままに見ようとすると経験主義に陥る
↓
現象・仮象にとらわれる
↓
経験の限界が明らかになると
公式主義・合理主義・教条主義に陥る
弁証法がいかに方法論的武器になるか
弁証法の法則の例
1. 量と質　　お互い転化しあう　　量から質へ　　質から量へ
2. 矛盾
3. 否定の否定

量と質　　多くの人間と参加できたので成功だった----弁証法的に誤り

意見----内容がおそまつだったので二度と参加したくない

↓

質が量を規定する

ある会でたとえメンバーは少なくても質が良ければ、友人に自然に宣伝するようになる

慣れ

彼女は目と鼻が美しい、好きだ、結婚

慣れてしまうと好きでもなんでもなくなる

後、現れるのはいやな側面ばかり　　新婚５年

いやな面も慣れていやでなくなる

好き嫌いの段階をこえて結びあうと老人の段階

習慣を破るのは習慣自身

量的蓄積によって質を変える

矛盾　　愛の定義----自分に欠けている価値、美徳を限りなく求める感情

背の高い人は背の小さい人を可愛がる

背の小さい人は背の大きい人を愛する

黒い人は白い人

白い人は黒い人

太った人はやせた人

やせた人は太った人

矛盾するものをあい引く（量的限界はある。社会的背景を抜きにして感情的傾向）

対立の統一

幸福----不幸との関連を用いて説明する・しない（従来の観念論）

不幸の逆立ちした表現

家さえあれば幸福だ----家がなくて苦しんでいる

心のもち方で幸福になる

自殺する人でも彼がそれを幸福と思えば幸福だ

-----自殺しなければならなかった理由を克服できない不幸

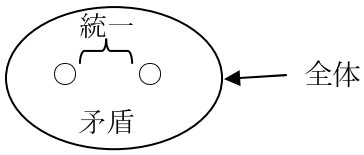
マルクス経批

生産	消費	
‖	‖	弁証法的考察のアプローチは
消費	生産	まずそのものの反対の側面に向かう

いかなる物事も矛盾において考察しなければならない

否定の否定

スターリンはこの法則をとってしまった

平面上 

立体上 A → 非A → 統一　　全体者-------真無限

ある青年がやくざになる

命をかけて足を洗う----無限のまじめさ

悪を知らないまじめさ----有限なまじめさ

いつ悪に落ち込むかわからない

再生産 ← 弁証法的概念

消費は生産の中に契機（要素）として含まれる

消費は生産と対立したものではない

否定の中で自己再生産を行う

悟性----物事をはっきり区別するために他のものから区別される特徴を獲得する

（消費から区別された生産）

理性----弁証法的

否定の否定によってとらえる。生産の契機として消費をとらえる

三つの法則はどこから来たか

エンゲルスによってヘーゲル論理学から持ち出されてきた

自然の中に適用できることの証明

1. 量と質----有論
2. 矛盾----本質論----本質における矛盾
3. 否定の否定----概念論

この三つの法則は同時に並べうるか----同じ次元にたつ法則ではない

マルクス以後、法則の例を断片的に持ち出す

レーニン---弁証法の根本法則は、論理学の体系構造そのもの

レーニン　人間は有の中から本質を見出して概念を構成する

弁証法の法則は認識論である

弁証法は体系として理解されなければならない

弁証法は例証のための公式ではない

まちがったとらえ方

兄

｜

弟　兄　←弁証法的統一　　現象論的相対主義

｜　　弟が生まれたという条件付きでとらえられる

弟

必然的でなければならない 本質論的に把握されなければならない

毛沢東の矛盾論

経験的な矛盾の類型化

主要矛盾----その過程を支配する矛盾

何を主にするかは条件に依存する

従的矛盾

敵対的矛盾----何を敵対的にするかは条件に依存する

非敵対的矛盾

矛盾というのは本質的な概念である

条件によって矛盾になったりしないものではない

----------第２回----------

弁証法---世界の最も一般的な発展法則に関する学

↓ ↘ 真実の学となりうる

人間の対象にする場合、どのようなスタイルが対象となるか

一般法則----主体的前提が必要

カント

人を殺した　　車にはねられて死んだと言った

人が殺されるにはある原因がある　　因果性が前提されている

人を殺すなかれ----人を殺すことは悪である

人間の類の意識　　高度に発展

「人間は類的存在である」　　マルクス

↓→ヘーゲルによって指摘

フォイエルバッハによって確立

なぜ人間は類的存在となるのか

----人間は愛のために死ぬことができる

もし人間の中に個体を超えた力がないとすれば個体を殺すことはできない

愛-----類的意識

人間は真理のために死ぬことができる

自分の個体を犠牲にする力----類の力（知性、愛）

「人間の類的存在は人間の行為によって示される」マルクス

↙

生産的労働----自分を客観的に示す

／

類的行為----類的存在の実証

生産行為＝＝＝＝＝実践----個々の現状を変革する

個別を超えた一般の立場が前提される

一般的なものをとらえることなしには個物を変えることはできない

変えることができないのは一般的法則だけである

↓→　自然法則

個々の法則-----一般法則によって変革が可能

一般性＝無限性＝自由

→　同じ範疇に属する

一般法則が問題とされるのは、人間の類的意識の高度な発展を前提している

弁証法----ヘーゲルとともに現代的な弁証法が始まった

ヘーゲル弁証法の理解が不可欠

マルクスの弁証法の位置が理解される

「ヘーゲルは弁証法の運動の諸形態を包括的に叙述した」（マルクス）

↓→　学としての弁証法の創始者

ヘーゲル以前の弁証法は個別的な法則として存在した

学としての弁証法----現代の弁証法

↓→　論理学

論理学の特徴

内在性（主義、的方法）
歴史性
総体性
} 一つに連関している
体系的に結びついている

切り離して研究するのは難しいが、その方法はある

人間の触覚-----純粋に研究-----ほかの感覚をもたないものの研究（みみず）

ブルジョア社会の商品----純粋に研究----資本主義以前の商品が参考になる

分析的思考においては歴史的なものがその基礎を与える

内在性、歴史性、総体性を研究するのに、その創始者の哲学者を調べる

内在性----ゼノン
歴史性----ヘラクレイトス
総体性----プラトン
弁証法の本質を構成する三つの特徴

ゼノンの弁証法----内在性

↓→　もののとらえ方がひそんでいる

ものの把握----ソフィスト的論法＝詭弁的論法

ものが複雑になればなるほど多くの側面をもっている

物事の外面によりかかって、人の意見を反駁する

地下鉄----地上に出る場合もある

1+1＝2　米 1ℓ と水 1ℓ をたせば 2ℓ になるか

弁証法とは無関係

弁護士的論法----都合のよい側面を取り出して論法する

外面的弁証法----主観的に事物を律する

対象に内在して反駁する

ゼノン　運動という考え方の反駁

パルメニデス　　本当の実在は不動者である一者である

（ゼノンの先生）理想----現実との反省関係

現実----戦争　　理想----平和

不幸　　幸福

真なる理想は現実との反射関係である

現実は運動に富んでいる→本当の存在は不動

現実は多様に富んでいる→本当の存在は一者

ゼノンの反駁（パルメニデスの擁護）「世界は運動である」という説に対して反駁

矢を飛ばして、この矢は飛んでいると言う

矢の飛んでいる分析----それぞれの点に止まっている

分析的に見ると止まっている

反駁

「世界は多である」→これ以上分割できない１というものの集合

それ以上分けられないものは大きさがない

大きさがないものを集めても無限小

分析と総合の矛盾

分析的なものは総合的に見ると反対である

彼女----きれいだ　　顕微鏡で見る----きたない

相手の説に即して矛盾を暴く----内在的考察

人類はゼノンとともに分析的思惟を発展させた

デモクリトス　これ以上分けられない----アトム

分析的思惟を進める-----原子論

対象の内在的考察----弁証法　客観的態度

「弁証法とは対象の内在的考察の学である」----弁証法の本質的定義

弁証法的矛盾----内在的矛盾

弁証法的連関----内在的連関（外的連関ではない）

弁証法的必然性----内在的必然性（外的必然性ではない）

↓→原因が外にある

私の動く原因は命令にある

原因を自分の中にもった運動→自己運動

弁証法は社会発展の原因を社会の中に求める

弁証法は自然の原因を自然の中に求める

弁証法は子供の原因を子供の中に求める

弁証法はブルジョア社会の原因をブルジョア社会の中に求める

内在的批判----本質の暴露

本質を明らかにすれば批判になる

ブルジョア社会の運動をあばく→ブルジョア社会の批判

ものを純化して内在的に考察できる方向においやる

外的要因は内的要因との関連においてとらえられたとき弁証法の契機となる

内在的方法＝絶対的方法

‖　　↓　（論理学）ヘーゲル

必然性　学問は客観的な学たりうる

実践の意義

大衆に対する啓もう活動----外から押し付けるのではなく内的に行う

相手に即して行う

会社----客の身になって

指導者----大衆に学べ

先生----生徒に学べ----内在的方法に即して実践する

エンゲルス----弁証法の法則を自然に押し付けるのではない

自然の中に発見する→内在的方法

弁証法は本質的に<u>唯物論的</u>である

↓

対象の内在的考察

弁証法と唯物論の結びつきは必然的である

弁証法-----機能主義的にとらえるのは誤りである

↓

ヘーゲル----観念論
マルクス----唯物論
} でもなく中性的である

スターリン

機械
言語
論理学
学そのもの
真理そのもの
} 階級制をもたない
↑
機能主義的にとらえ
本質的にとらえない
物事を中性化する

歴史的弁証法　ヘラクレイトス----生成の弁証法

ものは全て運動の中にある

ゼノンの弁証法とは真っ向から対立する

ヘラクレイトス　世界は運動する----矛盾の中にある

ゼノン　世界は不動である----矛盾の中にある

↘ 主観に陥っている ←―― だから相手の主張はまちがっている

王族　反民主主義的、反動的、孤立していた

内容は後世に大きな影響を与えた

ヘーゲル「ヘラクレイトスの命題はすべて私の論理学の中に取り入れてある」

↘ ３人の創始者の中の一人

エンゲルス　ヘラクレイトスを高く評価する（弁証法の創始者そのもの）

↓→弁証法の特色----歴史主義

エンゲルスとマルクスの差----ヘーゲルから割り出す

レーニン　ヘラクレイトス----弁証法的唯物論のすばらしい叙述

ヘラクレイトス----「闘いが万物を形成する」

闘争矛盾----生産的原理

闘いは万物の父であり王である

闘いが、あるものを神となし、あるものを王となした

闘いが、あるものを奴隷となし、あるものを自由人となした

対社会認識から来た

自然の認識----社会の認識が前提されている

万物の原理----火----生成変化をとらえるもの

最も変化しやすいものを持ってきた

万物が火から生まれ火に帰っていく→商品交換と同じ

火を実体とする----火の法則が万物の一般法則

↓

火が消える→空気→冷える→水→冷える→土

下り道

登り道

この法則によって世界は運動している

青年は青年である時に老人になりつつある

すべてのものは過程である。他のものになりつつあるものとして捉える

「あるものは潜在的に自分自身の他者である」

↓

他化する（フェアエンドルン）

人間--------死

生命 ↗ 他者

青年 → 老人

他者

「あるものは自分の中に否定を含んでいる」

↓

歴史主義の基礎

否定性----よけいなものではない

あるもの全体の本質を形成している

生命は死体ではない

死を含まない生命は生命ではない

食べないでも生きられる→活動がない

死なないために活動がある

毎日、細胞が死んでいる

生命は死を含んでいる

よき生き方は、よき死に方である
～のためなら死んでもいい-----よき生き方
死は生と結びつき、生の本質的契機を形成する
矛盾したものが本質をなしている

生産----労働、機械、原料の消費
消費なくして生産はない
消費は生産の本質的契機をなす
自分自身の他者----「内在的限界」を示す
限界、制限----生成の弁証法のカテゴリー
否定作用→内在的否定＝止揚
自己運動　　弁証法的否定概念

止揚（揚棄）
- 保存する
- 否定する（廃棄する）
- 高める、高揚

前の形態を否定して、それを保存し、より高い段階に揚げる
発展
低いものから高いものへ
単純なものから複雑なものへ

否定　　固定したものを許さない
徹底した否定の流れの中においやる
肯定的理解の中に否定を理解する

質　の真理は　量である
↓→否定性の中に真理がある
歴史の中には自分の中に真理はない
否定するものの中に真理がある
ヘーゲル----歴史的方法が普遍化される
歴史的方法を論理的方法とする
論理＝歴史
証明①歴史そのものが論理である
歴史の合理性----証明----歴史哲学
②論理の歴史性----論理学で立証

概念　　ヘーゲル論理学の中心
以前（発生史）　　概念の歴史
以後（展開史）　　一つ一つの概念が否定されて次々に新しい概念となる
推理

資本論

発生史（商品と貨幣）

展開史（資本）

ヘーゲル歴史哲学の前提----歴史は合理的である

精神　　歴史の究極目標----自由の実現

歴史は自然の基盤ではなく社会の基盤である

↓

精神（自然以外のもの）主観的、客観的、絶対的

物体の本質----重力

精神の本質----自由

歴史とは自由への意識の発展の歴史である

普----------特----------個

ゲルマン社会　　ギリシャ・ローマ自由民　　古代

すべての人が自由　　一部の人間が自由　　一人の人間だけが自由を知っている（王）

マルティンルターによって

原理的に自由が確立

知＝行（知っていることは実現している）

（知っている程度にしか実現できない）

（実現した程度にしか知ることができない）

歴史の各段階において民族精神がある

↓　　国家の体系

内在し否定する原理------世界精神

世界精神によって民族精神が一歩一歩否定される

最後に世界精神は実現される----ゲルマン民族とともに

↓　　ヘーゲルとともに

革命の精神をやめる肯定的役割

観念論

「ヘーゲルこそ哲学史を真に理解した人である」マルクス

ヘーゲルは学問的生涯をかけて論理と歴史の一致の証明を行った

外的歴史ではない-----現象形態としての歴史

内的歴史である-------純化された歴史

抽象

一般性（類）を求める（抽象によって）

人間----動物----生物----物体

|

植物

歴史的なものにさかのぼる、人間以前、動物以前

分析の道は歴史の道へとさかのぼる

一般的なものから現実（個別）をとらえる----歴史的方法

人間一般とは子供である

↓　　↓

個別化　　特殊化されていない　即自の段階

特殊化　　音楽家、政治家　　（潜在態、可能態）

一般的なものの追及→個別化、特殊の分析

【質問】

①内在性、歴史性、総体性、どれが一番の契機なのか。

弁証法の三法則、一つで言えば否定の否定であるのか。

----三つのうちのどれが本質的であるかによって、マルクスとヘーゲルの違いがある

②共産主義になった場合に最後の形態になるのか。

----共産主義以降の歴史はあるが問題にしない。

マルクスはブルジョア社会との関連だけが問題である。

③分析　どんな方法も分析的方法である。

分離-----疎外

存在との一致

④民族精神　一度滅びた民族は二度と現れない

他の民族をどのように位置づけるのかは問題にならない

英雄　革命的英雄

保存する個人（保守的英雄）

歴史を進めていくことがいかにして可能か

段階系列の弁証法が問題となり、他の民族は関係ない

否定的理性----歴史哲学

----------第３回----------

弁証法が運動を取り上げる根拠は

弁証法そのものが運動であり

運動そのものが弁証法であるからである

矛盾と解決は不可分である

表象

ふりわけ理論　　矛盾を（無思想）表象にもどす、解決するのではなく思惟以前の段階

空間的表象（並存的関係）

時間的表象（前後関係）継起関係

↓

矛盾は生じない

自由と必然

カント

実然　　自然

自由----止揚された必然性

偶然のところに自由がある

（必然から逃れたところ）

マルクス　　必然の中に自由がある

内在的な矛盾をとらえていない----外面性

反デューリング１２章

並存的及び継起的に考察する場合は、いかなる矛盾にもぶつからない。そこに若干の特性を見出し、一方は普遍的、他方は差異的、そこには何らの矛盾もない（エンゲルス）

-----形式的、形而上学的

我々が事物を運動するものとして考察するやいなや、我々はただちに矛盾にぶつかる

矛盾を認めるだけではなく、矛盾に内在する運動をとらえているかどうか

プルードン　　ふりわけ理論

経済学的範疇----よい側面と悪い側面　矛盾

有利な面と不利な面

善と悪

プルードンの弁証法----悪い面を消して、良い面のみを残す

マルクス----悪い側面がなければ良い側面はない

つながりは内在的であって外面的ではない

すばやく仕事を処理する----短気な性格

同じものの別な側面

矛盾が原動力
矛盾の克服が原動力
矛盾があるところには克服が必ずある
↓
矛盾の性質
矛盾のないところに克服を論ずるのは間違い

総体性の弁証法
↓
全面性---------弁証法は総体的考察の学である
（レーニン）
ヘーゲルにおいて絶対化されている
体系的な全体-----部分を包み込んでいる全体
「真理は全体である」ヘーゲル
↓
総体性
一面的、断片的には真理をとらえることができない
悟性----分析されたものを固執する
あるものを他のものから区別して特徴を固執する
学の立場でとらえる
思惟----------総体の別名
理性
（肯定的）
概念
現実
（体系となった現実）
理念

体系をもたないものは学ではない
この学問の概念がマルクスに受け継がれている

マルクス　最初の漠然とした表象→下向法を用いる
直観と表象の道
分析的に限定していく
下向法　思惟
直観、表象----→思考
上向法----科学的に正しい
総体性
科学
非学的---→学的
17 世紀　　18 世紀の経済学
資料が膨大になり必然的に上向の道をたどった

弁証法だけが本当の総体性に達する上向法である

ヘーゲル　学問的努力の目標→真理の学問的認識

↓

カントを中心にした悟性主義との闘い

↓→分析的思考

悟性は総合しないということではない

悟性は分析によって得られた結果を固定する

A と B

↑　↑

独立なもの

よせ集め

外的集合

ヘーゲル　悟性は真の総合には達しない

「理性の闘いは悟性によって固定されたものを克服することにある」ヘーゲル

体系をとらえるには、それ自身体系的な方法をとる必要がある。

真なるもの（思弁なるもの）----一面的な規定によってはとらえられない

↓→主張　ドグマティズム

これを総体性として自分の内に含む

個別的なものの扱い----廃除はしない

Sinn?　　Bedeutung

意味　　意義　　ヘーゲル、マルクス

意義をとらえる--------重要

他のものから区別されたその内容

普遍的なものとの関連、全体との関連が意義である

総体性弁証法の創始者----プラトン

開拓者であって、確立したわけではない

プラトンとともに総体的思考が発達した

ソクラテスとの比較

初期の思惟の特徴----自然的思考

Physis

自然

BC6～7 世紀　物事が自分自身の性質に従って動くもの

（物事は自分自身のなかに原因がなければ動かない）

偉い先生

BC5 世紀　ソフィスト時代

nomos

法

自然的でないもの、社会的なもの

ヘーゲルの法哲学の法はここから来ている

社会的思考の発展

ソフィストの元祖----プロタゴラス

「人間は万物の尺度である」

人間尺度

Nomos の原因は人間自身にある

すべてを規定するものは人間である

アテネの学校　弁論術　総体的知識　ある人には善であるが、他の人には悪である

主観性----人間を基礎におく結果

ソクラテス----統一

社会的思惟の中で客観性を確立する

客観的に普遍的なものは何か

社会的なものが関心で、自然は我々に何も教えない

青年に教える

教育革命

ソクラテス　母親から受けた影響が学問的生涯を決定した

マイエウティケー

産婆術

助産術　　産むのを手伝う----母から教えられた

教育的マイエウティケー

青年自身によって客観的普遍を探求するようになる

内在的教育　　イデア

（プラトン）

現象的なことは知っていても本当のことは何もしらない

プラトン　　マイエウティケーの実り

国家を良くするためには何が必要か-----個人の生き方

個人の良き生き方が、国家の良きあり方

個人の魂　①理性--------知--------統治

三分する　②意志--------勇気------軍人・官吏　理想国家

③感情--------節制------大衆

↑　　↑

徳　　生産にはげみ

徳　アレテー-----理性の使命

↓

最も本質的な長所

徳の発揮----正義

国家自身が一つの有機体である

ソクラテスとの相違----スケールの大きい総体的見地からとらえている

プラトンの優位性 ↗

弁証法的見地

プラトンはヘラクレイトスを研究した

イデアの中に取り入れる

弁証法----対話法、問答法

真理へ向かわしめる

思考作用そのもの

↓

魂が自ら質問したり答えたりしている

内面的問答

思考---声なき内面的問答
ことば } 同じもの

弁証法----思考作用独自の論理

概念をもって思惟する

善なるイデア、実体 ↙

究極の第一原理まで（知覚を借りずに）理性的に思考を進める-----弁証法

上り道　プラトン以外のソフィストにもある弁証法

マルクス、ヘーゲル ↗ 下り道

抽象から具体へ（上り道）

第一原理から全体を把握する-----下り道----プラトン特有の弁証法

↖ マルクス　上向法

ヘーゲル　特殊的なものを解消して普遍的なものを産出する-----真の弁証法ではない

一層進んだ弁証法----特殊的なものの混合化によって生ずる普遍的なものを、

その矛盾を自己の内で（普遍的なものとして）解消される

もろもろの対立から総合されてくる

総体性弁証法の核心----統一作用

① 外から持ち込まれる統一ではない（折衷主義）
対立の中に潜在しているもの
哲学的思考は必然的（内在的）であるから
ある概念のうちに含まれているものを措定するだけである

西田幾多郎の弁証法
一般即個
↓
個が置いてある場所
一即多
内在的にとらえないで外面的に統一する

有　無
成

分析的演繹
↕
すでに潜在いているものを
取り出して措定する

内在的にとらえる

② 区別を排除した統一ではない
シェリング　区別なき統一
世界は多種多様であるが絶対者においては統一である
ヘーゲル「シェリングの統一はすべての牛が黒く見える国である」
同一がなければ統一はない
同一に基づいて出てきた全体----統一
絶対者は主観的と客観的との統一である
----不十分、統一のみが表現されて区別がない
統一＝生きた体系

核心　生命性
有機体

主　客

統一は区別の措定である
↑
プラトンはこれをとらえていない
アリストテレスはこれに一歩近づいている

肉体から切り離された手は、名前だけ手であって、手ではない（ヘーゲル）
全体との関連において見られた場合、手は手となる

矛盾　内在的を抜きにして矛盾は語れない
歴史的
総体性のみが矛盾を矛盾として認める

男｜女
悟性は矛盾の中を動く

悟性は矛盾によって支配される

弁証法は矛盾を支配する

悟性：男性----女性的でない定義だけを集める

弁証法：女性の側面を暴露して、それとの連関において男性をとらえる

A　　非A

同一律　‖　←前提

A

措定(setzen)

> AはAであるという措定作用は非Aを前提している。
> これは矛盾である
> 非Aの措定なしにAはAであると言うことはできない

前提----voraussetzen

前もって措定する

Aの非Aとの関係を背後に隠さず、これを明らかにして

AとAとの関係をとらえる

【質問】

悟性----弁証法----思弁

父なる神	論理学	はじまり	実体
抽象的、普遍的			
子なる神	自然哲学	過程	
特殊化			
聖なる神	精神哲学	総体性	主体
もとの普遍性に帰る			
個別			

ヘーゲル

個別----感覚的な個別ではない

一つにする。結合する。普遍的なものが（現実的な）特殊なものになって

特殊なものを一つのものにまとめ体系化する

実体　根本原理　展開以前

主体　展開をまとめたもの

ブルジョア社会の発展---主体的になる　　主体----体系全体

体系的になる

真理----断片的にとらえられない　　男性を男性だけでとらえる

学問的にとらえられる　　（全体的）体系的

----------第４回----------

弁証法は総体性に関する学である

総体性----事物の発展段階において成立する

歴史の最終的段階において成立する

ヘーゲル　最終段階----理念----総体性の別名

Idee

「理念とは即自的に全体であり----------総体性である」ヘーゲル

真理＝総体性＝有機的体系

真理は結果である

歴史　　事物の否定の原理として矛盾が作用する

総体　　事物の生命の原理として矛盾が作用する

（調和）

１巻２節　流通手段　冒頭　　楕円---調和のとれた運動----総体性

資本が総体性として成立するためには、商品の矛盾が止揚されるのではなく、それが実現されていかねばならない。

ヘーゲル　　矛盾---{死滅する原理 / 生きる原理}

思弁的思考----矛盾を支配する----生命原理として取り入れる

過程にある有限なもの----矛盾に支配されて消滅する

歴史 動的	と	総体性 静的
総体性にいたるまでの段階 すべてのものが否定される 否定するものこそ真理である 全体----そこへ向かうべきもの 真理----否定、歴史的必然に合致 発展の原動力----闘争矛盾 必然性----否定的連関 無限進行 実践 歴史的過程		肯定的側面が主要 絶対的静止でもあるような自己内部の運動 全体の質を保証する運動 体系内運動、仕組みの内部の運動 ↓→具体的歴史　イリエンコフ | 資本の範囲内の歴史 全体----与えられている 真理----体系に合致する 調和矛盾 肯定的連関 全体の静止、真無限 追思考、学問 歴史の最後の段階

歴史的現実概念

　　否定さるべき現実概念

真理はである----認識論的に重要な意味

弁証法----具体的なものから出発する

　　|

　　感性的なものではない

　　最も発展した状態からとらえる

　　真なる状態からとらえる。後からとらえる

　　Nachdenken

Nach/denken　　追思考

あと/考える　　後から同じ考えをたどるのではない

　　学問的思考

　資本論　1章4節　人間的生活のNachdenkenは、したがって学問的分析は、------

総体性を前提とした思考

ミネルバのふくろうは、せまってくるたそがれ時とともに（はじめて）飛び立つ

↓　　↓

ギリシャの文化の女神　　聖女　　現実過程の結果

学問的認識一般は、現実的成果の実践をまって、はじまるのである。

小論理学　9節　Nachdenken----哲学的思考

　　論理的思考

資本論

　　商品----貨幣----資本

　　必然性----資本に根拠がある。資本を前提にしているから、上の順序が必然的になる。

　　資本を前提せずに商品を分析しても資本にいくとは限らない。

　　論理学の有についても、同様に理念を前提している。

Nachdenken

　　‖

An sich	Fur sich
即自	対自（向自）
潜在的	顕在的
可能的	現実性
‖	‖
Fur uns	措定＝叙述
われわれにとって	Seten　‖
われわれの段階	即自的なものを表に出して措定する

即自的なものをどうやって知るのか

子供----理性的存在----なぜ知ることができるのか----大人を前提として見るものにとって子供は即自的に理性的存在となる。

即自的段階---- Nachdenkenによる分析によって明らかになる

マルクス　単純な流通は考察者の立場からのみ、即ちan sich にのみ存在する

措定するとは、後のものを前提して前のものを分析していくこと

大論理学　定有　叙述によって大切なのは、概念と措定されたものとを区別することが大切である。

----これができるのは弁証法だけである

われわれの研究と、事物自身の叙述との区別

これを理解しないと、資本論の方法を弁証法と形式論理学の統一と考えてしまう

----見田石介→宇野

松村一人のヘーゲル理解

有----無----成

この叙述に必然性があるか、これをどう解釈するか

存在過程と見ると神秘的なものになる

これを思考過程の論理として読む

現実にあるものは成だけである

発生、消滅

成を理解するために、有を取り上げ、それだけを分析し、次に無を、

そして最後に統一として成を認識するという認識過程である

質----量----限度　　----否定の否定（思考法則）

この応用----見田石介

資本論

使用価値----価値----交換価値

現実は全体から全体へ移行する----現実と思考の分離

上の意見の反論

有----無----成

この必然性は成のうちにある。成を前提している。　　成 ── 消滅　有→無

成を前提して有のうちに無を見ようとする。An sich　　　　 ╲ 発生　無→有

限度の中に質から量へ、量から質への運動があるから

質の中に量を、量の中に質を見ようとする。

初版　資本論　私の判断---fur uns

リンネルが語る

エンゲルス　運動----われわれだけの判断ではなく、

一つの形態から別の形態へ変わることにより、事物自体がそれを示している

宇野---- Nachdenken----内的考察ではないと思い込んだ

外的反省

主観が外から、勝手な尺度をもって事物を考察する

われわれによる反省であっても外的反省ではない

事物の真なるものをもって考察しているから内的である。

歴史形態に対応した理論展開とした

資本論を純化する（原理論として)、なぜなら帝国主義が出てきたから

3 段階論の提起

認識論を排除する存在論的立場----見田、(松村の逆)

----------第５回----------

弁証法の本質的な三つの特徴

内在
歴史
総体
} 弁証法である限りは、どれでも欠くことのできない要素

三つの特徴の統一の仕方→本質

↓

ヘーゲルとマルクスの相違

歴史にそれぞれ実在していた三種類の弁証法であった

↓

統一体にもたらした----ヘーゲル

ヘーゲル弁証法----あらゆる弁証法の基本形態

ヘーゲルは弁証法を定式化しない→弁証法による要求

方法は内在的である

したがって定式化は弁証法に反する

方法＝結論（ヘーゲル）

絶対理念----弁証法の方法

最も観念論的→最も唯物論的

方法----内容の内的な自己運動の形式を意識化したもの

|

分離して取り扱えない

----純粋な本質のうちに打ち立てられた全体の構造

総体性を前提とした思惟----nachdenken

----体系的方法

内在的考察は方法と一致する

内在的方法
歴史的方法
総体的方法
} 統一が弁証法

（体系的）

（思弁的）

内在的方法----立脚点、大前提

問題は、歴史的方法と総体的方法との関連である

対立した相反する方法

ヘーゲルは体系と方法が矛盾している（エンゲルス）

（弁証法）

ヘーゲルの体系から見ると、彼の弁証法は成立していない

↓→エンゲルスはこれを歴史的方法と見ている

体系と方法の一致----ヘーゲルの功績

ヘーゲル----思弁的方法を絶対化し、歴史的方法はそれまでの過程とした

ヘーゲル----内在的方法を大前提として、歴史的方法を総体的方法の従属的なモメントとして位置づけた

マルクス----歴史的方法が基礎

論理の三つの側面（形式上）

悟性　（抽象的）

↓

弁証法（否定的理性）

↓

思弁　（肯定的理性）

理性の二つの機能

「弁証法は理性の次元でのみ成立する」

カント----理性的思惟は弁証法に陥る

理性の対象は総体性である

エンゲルス　自然弁証法

悟性と理性 ―― 弁証法的思考、概念を前提している

―― 人間にだけ可能

↓

動物にもある

発展の度合いが違うだけである（人間と動物）

悟性 ―― この区別は重要である

弁証法 } 理性

思弁 }

上における

弁証法の位置

エンゲルス

形而上学的　悟性----すべてを固定化する機能

他のものから分離

固有の規定の確保

↓

第一否定　弁証法----固定した限界を内在的に打ち破るもの

弁証法　否定的理性

↑　悟性に対する否定→「第一否定」

エンゲルス　無限の歴史性

弁証法の特徴　歴史主義的弁証法の可能性

第二否定　思弁----総体性を作り上げる

第一否定の否定

止揚

「弁証法の二大機能の定式化」

① 否定性（悟性的なものを）

② 総体性への止揚

ヘーゲルの総体性の重視は彼の汎神論と結びついている

神学的解釈

悟性----我は我である、神の慈悲による

弁証法----神の威力である、すべてを否定しさる

思弁----神を見る、神を認識する

spekulation　神は全体である、神は自己を認識する

体系の絶対化＝学問の立場の絶対化

↓　　理論的態度の絶対化

歴史は最終的に完成する→実践的に歴史を進める必要がない

‖

ヘーゲル弁証法の本質的構造

以上を前提としてヘーゲルの著作を眺める

●「精神現象学」

ヘーゲル哲学の誕生地

先行哲学に対する対決、自分の説を意識的に規定

○構成

序文　全体を書き終わってから書いた。→結論である

結論をもって全体の導きの糸とする。内容の展開ではない。

自分の立場を対他的に述べた

緒論

本論

○序文の内容

近代哲学の支配的な潮流

1. スピノザ主義（実体哲学）

欠陥----自我が欠けている。思考する人間の立場

2. カント（自我哲学）

欠陥----物自体からの分離、空虚な思考

3. シェリング（同一哲学）

欠陥----すべて同じにしてしまう、統一の非弁証法的理解

カント----現象だけを見ることができ。

主観の形式によって対象が構成され、色メガネをかけて物を見る

客観性の欠如

ヘーゲル説

1.「実体は同時に主体でなければならない」

実体は自己展開で動く（スピノザ）

客観的な実体の中に、主体が埋没されてしまう。

「神（実体）を精神又は理性と理解する」

人間の精神こそ神にふさわしい

神の絶対化＝人間理性の実体化

2.「自我の運動が、物自体の運動でもある」

物自体は彼岸にあるものではなく、自我によってとらえているもの一つ一つが物自体である。

3.同一性＝芸術的直観（シェリング）

天才だけが絶対者をとらえ得る

哲学は学問でなければならない

「真理は学問の形態においてのみ存在する」

真理の基礎は概念である

○緒論の内容

精神現象学の対象と方法

対象----人間の意識に現れた知識

「現象の知識から学問の知識へいかに至るのか」

その必然性を経験的に説く

方法----意識----------対象

対立

意識の運動を内在的に考察

「意識の内在的超出」

つぼみ----→花----→実

否定　　否定

歴史的方法----全体の生命が形作られるように進む

-----一つの体系となるように進める

内在的方法をとりながら、歴史的方法を体系的方法に一致させる

意識自身が自分を吟味しながら展開していく

「原動力」----内的矛盾

↑　　↓

認識を進める　　主観と客観との矛盾（分離）

主観的確実性　　客観的真理

意識の<u>経験</u>の学

|

実践的

意識が経験する度に対象が変えられる。対象が変われば意識も変わる。

○本論

1.意識　{ 1.感覚 / 2.知覚 / 3.悟性 }　対自然的経験　自然に対する認識

2.自己意識

3.理性

（1）　意識

(理論的)

1. 感覚----「個別性」においてとらえる

今、ここ、このもの、この私

現代　　現実

「哲学は現実、現代を超えてはならない」法哲学

感覚は感覚自身の矛盾によってのりこえていく

感覚の源である物（ding）をとらえる

↓

知覚

2. 知覚----特殊的

物　⇔　物　　確実だと思われた物が他の物に変わる（相互作用）

変化　　物の背後に確実な本質がある

↓

悟性

3. 悟性----「普遍性」を求める

本質＝力

力によってすべてを説明する

物的な形態がない

説明----主観の運動、思考の運動

「人間の思考がどれだけ発展しているか」

↓

自己意識

（2）　自己意識

実践的な意識

物より意識のほうが優位である

1.　欲望

物に対する

独立した物が人間によって否定される

自己意識の方が優位　　見える

実は逆に物なしには欲望がないように、物によって支配されている

欲望　⇔　物

2.　自己意識と自己意識

人と人

欲望的な見地から人が相対する

欲望の関わりとして闘争する、「万人の万人に対する闘争」ホッブズ

主人と奴隷

勝者　敗者

奴隷は主人の命令によって、主人の欲望を満たす

物を作りだす----労働（奴隷労働）

|

（疎外労働）マルクス

奴隷が主人としての意識を獲得する----労働において、物に対することによって

労働することによって真の人間となる（奴隷労働でさえも）

主人----欲望の主体

奴隷----欲望なしに働く→普遍性に高まる

欲望　⇔　物

支配

主人　→　奴隷

←

支配 ――――社会全体が転覆する

3.　奴隷意識の発展

ストア主義----禁欲的、感性を否定して理性的になる

普遍的なものを求める

懐疑主義------確実なものは何一つない

不幸な意識----キリスト教の前提

欲望を否定して、普遍性になろうとするが、

それができなくて意識が分裂する

現実と意識との分裂

（３）理性

経験的理性

理性が真に成長するのは「社会」においてである

1.観察する理性----自然界

感覚との違いはあらかじめ仮説をもって（主観的前提を意識にもって）観察する

理性の観念論

意識的に対象に立ち向かう

|

内と外の一致

観察したものは、そのものの本質を現わしているはずである

特徴----外からとらえる----外的反省

ルネサンス以降の近代科学の理性の進展

a.　記述

b.　標識（区分）

c.　<u>法則</u>（関係づけ）

↓→内的な関係を表していない

法則化された記述にすぎない

外面性を脱していない

有機体の観察

再生産によって、内と外の一致が示される

外　　と　　内

（環境）　　（身体の構造）

有機体の場合には「環境による分類」は内的なものと一致する

生命体の（対象への）機能が、（有機体の）構造を変える

機能

a.　感受性----理論的要素----神経組織

b.　反応性----実践的要素----筋肉組織

c.　再生----------内臓

外なる機能　　内なる機能

心理

人相学----------当時流行していた事例

骨相学----安定的　　経験的

心　　「精神は物である」

‖　　観察的理性の結論、成果

物　　最初からの前提

2.行為的理性

働きから認識する（対象からではなく）

a.快楽と必然性

‖　　子どもが生まれる----家族関係に入る

愛欲（男女間）

対物関係ではない

b.心の法則と自負の狂気

主観主義的に解釈されて、自負の狂気に陥る

c.徳と世路

|

あるべきものが何であるかを求めて世間と闘う→ドンキホーテ

何が正義となる基準となるか　　基準がなければ世間に追随するしかない

世間と一体となる個人----社会に即して生きる

----------第6回----------

3.自覚的に在る個人性

1. 精神的動物の国＝市民社会

｜　　私利、私欲によって行動する

人間である限り妥当する

欺瞞が本質的

本人がどれほど誠実に追求しようとも欺瞞的なものになっていく

個人----努力する----仕事----Sache（事柄）

｜

誠実に行っても、自分の欲望のためとしか見なされない

-----精神的動物の国では

2. 立法的理性

精神的動物の国を前提すれば、法律によって律しようとする要求が必然的に出てくる

「個人の行為は、いつも普遍的になるように行為せる」カント

｜

立法的理性

3. 査法的理性

（吟味する理性）

感情が理性法則（道徳）を曲げる

すばらしい人格者----感情を理性によって押さえる----プラトン

やらなければならない（理性）というのは未熟な段階

好きでやるのが高度な段階

義務によって行為しようとすれば義務と義務が衝突する

ねずみ小僧----違法----小僧自身からすれば義務となる

真の法則はどこに求めるか

Sitte----意識するとしないとに拘わらず法則が存在する

習俗

習慣→道徳よりも真なるもの

Sittlichkeit----真実のモデル

人倫性

（人倫態）社会共同体、社会的現実態

人倫の考察→精神

（4）精神

Normos

1.真実なる精神

3つの歴史的なパターン

1. 人倫的世界　ギリシアのポリス

原始的に見られる真実なる世界

個人と普遍性が一体である

家族（人間の掟）--------国家（神々の掟）

一体

属す

女　結婚　男

推論構造

三つの項が一つを媒介にして結びつく

男性は女性を通して家族に結びつく

夫婦関係----ポリスの成立をせしめる

自然的関係　　持続性がない

矛盾が発生する

家族としての自然な感情

2. 人倫的世界の崩壊----ローマ帝国によるポリスの破壊

3. 法的状態----ローマ帝国

社会の中に人倫性を求める

法----すべての人間は平等----形式的人格が基礎

現実が荒らされている状態が、法の成立する根拠である

法が厳しくなればなるほど社会は不安定となる

平等　（弁証法的概念）

----不平等な条件にあうように取り扱うこと

男は男の条件にあうように取り扱うこと

女は女の条件にあうように取り扱うこと

大人は大人の条件にあうように取り扱うこと

子供は子供の条件にあうように取り扱うこと

法----同じくする----共通な条件が必要

法----形式的な平等であって、真実の平等ではない

個人は社会に否定的であるが

2. 疎外された精神

a.（自己疎外的精神）

国家権力　対　富

対立物

人間の意識の二分

高貴な意識（人間）　　下賤なる意識（人間）

国家権力と一致 ---------→ 国家権力と一致しない

転化

国家権力に反抗

b．(啓蒙)

純粋洞察 ―――――― 信仰

↓　　(現実を離れた所に真理を求める)

啓蒙（現実主義）

あらゆる信仰を打破する

再び個人の絶対的自由を確立する

|

物を有用性の見地からのみ見る

c．(絶対的自由と恐怖)

フランス革命の後に恐怖政治がやってくる

諸個人の自由を保障することなしに自由を説くから、恐怖政治によって否定される

個人は再び現実に対して認識を始める

カントの道徳的要請

3. 道徳性（自己確信的精神）

a.　カントの 3 つの要請

1.　道徳性と幸福との調和

2.　道徳性と感性との調和

3.　神の存在を要請する（啓蒙思想と反対の主張）

要請----現実性をもたない（ヘーゲル）

b.ずらかし Verstellen　ものを置き換える

道徳律をあえて行おうとすると、人間が二重人格となり、ずらかしとなる

c.良心　外の規則によって動くのではなく、自分の規則に従って動く。個人の自立性

良心の判断＝神の声（カント）

反社会的　　個人の中に閉じこもったもの

うるわしき魂----欠陥----非実践的

魂の純粋性の保存は実践をしないこと

批判的にとどまる

真なる現実法則をもって個人の行為を批判しないならば、

うるわしき魂の尺度が非現実的であれば、それは悪となる

現実的なものを判断の尺度としなければならない

赦しと和らぎに達する

宗教においてここに絶対的精神に達している

ここから宗教が始まる（ヘーゲル）

（5）宗教

a.自然宗教----光、植物、動物、工作人　　神を（客体的な）実体としてとらえる

b.芸術宗教----主体的なもの、神を道徳の化身としてとらえる

人間と神の交わり

運命

c.啓示宗教----キリスト教、実体的なものと主体的なものとの統一

父なる神

精霊として現実を否定して、　　イエスは死ななければ意味がない

の表象をつくる

宗教の欠陥

神が一人のイエスを通して現実化した

物信意識＝表象

表象	概念
たとえ話をいれないと理解できない	物を本質かつ論理的に理解する
宗教はたとえ話である	真の把握、思惟

神は現実的なものに

現れなければならない→概念形式に転化しなければならない。

啓示宗教は表象であり、これを概念に高めなければならない

（６）（絶対知）

概念-----普、特、個

表象的にいえば、父なる神、子なる神、精霊なる神にすぎない

本当の学であるためには、表象的な段階にとどまっていてはならず、

普遍的なものにならなければならない

普遍は特殊を通じて個別に至る----絶対的法則

論理学----概念形式をとく

●**「法哲学」**----全社会観、歴史観の展開（法だけに限られているわけではない）

自然法および国家学

法 normos（人為的なもの、社会的なもの）

↕　対立

自然 physis

精神＝法、社会的なもの一般

＝客観的な精神

法哲学＝客観的な精神の哲学

法の定義----自由意志の定在一般

人間的なものは自由意志をもっている

人間的なものは全て法になる

社会的なものは全て法になる

序文　国家的現実を取り扱う哲学的考察の姿勢

国家や現実をいかにあるべきかとうことで考察してはならない

(sollen)（当為）

出来上がった現実、国家、sein（有る）を概念的に把握することが哲学の課題である

当為が問題ではない

真実にある存在を把握することが課題である

出来上がった現実とは何か

現実の概念

‖

理性的なもの

現実が発展して理性的な総体性を形成した

現実はすでに完成している。この現実を把握する

緒論

人間の本質は何か----思考する

思考----二重の機能　　世界

① 理論的機能 ← 法則

② 実践的機能→実在に移す

‖

意志----思考の一つのあり方

理論の一契機にすぎない（ヘーゲル）

理論を絶対化するために実践を説く

実践に意義を持たせていない

思考から意志が出てくる

3つの意志（意志の三つの機能）

1. 抽象的意志、一般性（特殊性でないもの）

否定的　　意志の普遍性

2. 特殊的意志

制限された意志

3. 個別的意志

統一、一つにする

本論

1. 抽象法----物に対する人間の権利

人格→所有権→契約→不法→刑罰

法的人格　　正義の実現

｜　　裁く最後の支えは良心である

所有権をもっているか否か　　裁判官のよりどころ

（子供、奴隷は認められない）

2. 道徳性

人格べ

道徳的人格

自己反省の能力があるか否か---当為(sollen)にしたがって規範を作らなければならない

↓

二元論に陥る

非現実的な抽象にすぎない

規範となるべきもの→人倫性

3. 人倫態

1. 家族----自然共同体、この中で働いている論理が規範である

↓解体　Liebe 自然的愛 { 財産 / 子供（愛の現実化） } 家族を家族たらしめているものが家族の崩壊の原理となる

2. 市民社会　独立した人格として、全ての個人、家族が相対する

（定在社会）個人が私利、私欲をめぐって争う

欲望の体系→労働→分業と交換

各人の所有権を保障するための機関----警察

同業組合----同一の利害によって形成される

生産関係＝市民社会

各人は欲望によって必然的に

分業と交換によって欲望の体系が形成され、組合、警察が生じてくる

↓

国家

3. 国家----市民社会の矛盾を解決し、それを保障する

国家によって市民社会の矛盾が止揚される（ヘーゲル）

マルクス----市民社会は国家によって解消されはしない

幻想である

あるべき姿の国家----立憲君主国

{ 君主権
統治権　　マルクス
立法権　　市民社会の立場から批判 }

4. 世界史

国家---------国家

私利私欲　|

利害関係----国際法は無力である

常に戦争の種がひそんでいる

どこの国が勝利を収めるか

最も発展水準の高い国が先頭に立って、他のものを支配する

世界史が審判を下す

●「歴史哲学」

（緒論）----歴史の原理論

【1】　一般的緒論

（１）歴史考察の種類

歴史には三種類ある

1.　本源的歴史----その時代に生きた人間がその事実を語る

（主観的）　　ヘロドトス、チャーチル回想録、ヒットラーわが闘争

2.反省的歴史　　歴史は過ぎ去っている、後から眺める

1.一般史（概略史）

2.実用的歴史（教訓的、プラグマティッシュ）

歴史を教訓化→過去の現在化

誤り

3.批判的歴史

4.専門史（宗教、文化、法律）

本質的に深まる

歴史全体との一般的な理解なしにはできない

3.哲学的歴史----歴史全体

歴史の合理性----ヘーゲルの前提

↓

歴史と論理との一致

歴史の内に法則性を発見

先天的な概念を歴史に持ち込んではならない

「われわれは歴史をあるがままに、経験的にとらえなければならない」

（２）世界史の理性観

1.歴史の忠実な把握----真なるものは感性的な表面にはない。

理性的に眺める者にとってのみ、

歴史にある理性的なものが見えてくる。

世界の実体的なもの、理性的なものを把握するには

概念の眼差し、理性の眼を携えていなければならない。

世界史は理性的に行われた＝神の摂理が世界を支配する

2.歴史の理念とその実現

a.歴史はどこへ進むのか（究極目標）＝自由の実現

観念的設定ではだめ。

歴史の地盤（担い手）----精神（自然と区別される社会的精神）→精神の特徴＝自由

b.目的を実現する手段----人間が歴史を作る

目的----自由

手段----人間

世界史の中では、いかなる出来事も、情熱なしでは遂行されなかった

人間を動かす背後の法則----理性

「理性の狡知」----資本論・労働過程

人間は自分の目的を追求しているが、それらを通じて、理性は自分の目的を実現している。

英雄----歴史の転換期に現れる。

次の時代に至るべき理念を理性的に知る（wissen）

一般大衆は感じる（fuhren）のみである。だから大衆は英雄に従う。

----------第７回----------

（理論が大衆をつかむや否や、物質的力を獲得する）マルクス

c.世界史実現の素材＝国家

3.世界史----国家を建設した民族だけが登場することができる。(民族精神)

国家＝宗教、芸術、科学、法律etc.を有機的に結合したもの

【2】地理的条件

「地理的条件が民族の性格を決定する」モンテスキュー

自然的条件は、副次的、外面的条件であり、歴史自身、社会自身の中に原因を求める（ヘーゲル）

イオニア地方----ホメロス

歴史の原因は歴史自身の中に求める（マルクス）

生産における矛盾----主導的力

地理的----------２次的

能動----内部 ←ではない

受動----外部

子供は最初は受動的であるが、後になって能動的に発展していく

能動、受動は発展に関する別のカテゴリー

【3】世界史の歩みの順序

1.東洋的世界-----個別的自由、一人のものだけが自由（を実現している）

専制政治

2.ギリシア・ローマ----若干のものだけが自由

奴隷制の上に立っている

ギリシア----民主制

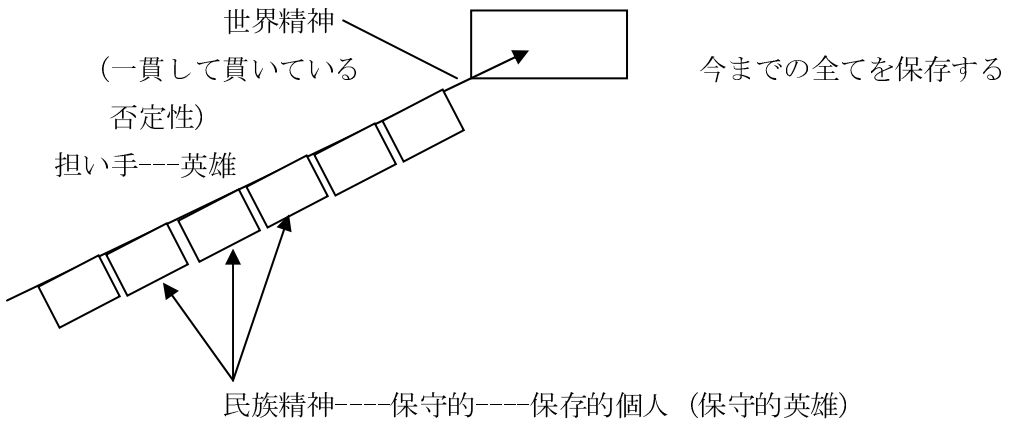
ローマ----貴族性

3.ゲルマン的社会----すべてのものが自由

立憲君主制

ルター宗教改革、各人が神の前で自由である（原理的に確立）

実現→フランス革命（現実的徹底）→総体性（自由の全面性）



●「**大論理学**」

あらゆるものの見方を集大成したもの

主観的なものではなく客観性を有する----法則である

第１版への序文　1812

第２版への序文　1831.11.7　死の一週間前、遺言

序論

本論

第１版への序文　　論理学に対する思想

初版　1812

25 年前　「カント　純粋理性批判」以来ドイツ哲学界に大変革が起こった

ひどい目にあった----形而上学----本質的に把握された存在

‖

（存在論）

理性を超えた議論----実体論は独断である（カント）

認識の能力を超えたものを議論するもの

論理学は影響されなかった----理由----頭の訓練にすぎない

論理学こそ真の形而上学である（ヘーゲル）

本来の形而上学、純粋の思弁哲学----論理学

従来はこれが欠けていた

思考方法だけではなく、存在論でもある

ものを見るとき帰結を引き出す----この見方は対象における因果性からくる

対象における因果性の法則が思考の法則ともなる

存在としての論理学の対象----あらゆる自然的精神的生命の純粋本質

従来の論理学と方法の点でも異なる

方法----内容自身の本性

内容自身の形式（絶対的形式）

内在的形式

（内在的方法）

第２版への序文

論理学の材料----◎形式論理学----第１の材料

◎人間の言語----第２の材料

人間が言語で表現する事柄はどれもカテゴリーを含んでいる

論理的なものは人間にとって自然なものであり、人間の本性と考えても良い

（自然的論理学）

◎経験科学----第3の材料

自然観察はカテゴリーを必ずともなう

観察する理性

bekant（熟知的）であるものは必ずしもerkant（認識的）ではない

bekantをerkantに高めなければならない

自然的論理学　　学問的論理学

（思考）　　（思考）

自然的思考の学問的思考に対する関係

思考一般----素材にとらわれている

古典派経済学は素材にとらわれている（マルクス）

形態規定に対して考慮を払っていない

思考形式が何であるかに気がつかない

思考形式は素材にくっつき対象の本質をなす

↓

概念（論理的なもの）

精神を動かすところの論理的本性

人間の思考は事物の本質を超えて思考することはできない

概念

論理学の仕事----素材に付着している論理的なものを取り出して純粋に考察する

本能的人間　区別、カテゴリーを自覚的に考えるか否か

理性的人間

素材の網の目のうちに埋没させられている

カテゴリーを分離し区別する（レーニン）

カテゴリーの純化----論理学研究の課題

序論

1. 論理学の一般概念
2. 論理学の区分

1. 論理学の一般概念

一般的規定----思考の学

素材にくっついているカテゴリーを分離する----アリストテレス

その後、論理的なもの----主観的形式であり、対象とは関係ない

|

形式論理学

形式論理学の欠陥

1.思考形式の内の有機的連関性が欠けている

↓

全体として一つの内容をなす

↓

形式化されない

2.個々の思考形式といえど Sache（事柄）を表現しているのであって純主観的なものではない

|

物ではない、物の内的あり方

その物の関係、法則性

論理学においてカテゴリーは Sache を表現している

一致している

精神現象学の結果、証明された

純粋な学問は、意識にそなわって、その対象から解放されることを前提した

論理学　　精神現象学　　主観と客観

2 の解決　純粋学は Sache 自体を、それがカテゴリーであるかぎりにおいてもっている

1 の解決　従来の論理学の死んだ形態が生命を吹き込まれるためには

方法がなければならない

↓

弁証法、内在的考察の方法

論理学----影の国（見えない世界）

本質の領域（感性の領域ではない）

2.論理学の一般的区分

区分----便宜的な区分ではない

弁証法における区分----事体に即した区分

概念自身の内在的区別に基づいている

↓

存在と思惟

存在概念----存在の論理学（客観的）

思惟概念----概念の論理学（主観的）

両者の媒介をなすもの----本質論

ヘーゲルの本当の本質は概念である

ある存在の関係、仮象を否定し、それ自身を規定する主体的なもの、

そういう本当の論理学----概念

有論（存在）----事実

本質論

概念論　　sollen----あるべき姿

存在がいかに概念と結びつくか

(事実)　　(当為)

↓

本質までつき進めば概念と一致する

(sollen)

人間の本質----理性

人間は理性的に形成されなければならない----sollen

人間の本質----歴史的

人間は歴史的に形成されなければならない

本質まで到達した認識は実践まで進む

に結びつく

すべてのものは概念に一致しなければならない

エンゲルス　　論理

存在論-----一つの法則を取りだす　①量と質--------移行

本質論-----一つの法則を取りだす　②矛盾----------反省

概念論-----一つの法則を取りだす　③否定の否定----発展

第3巻は真理であるから全体を適用される

相互の法則がバラバラにされ、公式化される危険性

プレハーノフを批判（学としての弁証法を理解していない）レーニン

3法則は弁証法の要素である

体系を問題にする

存在から本質をとおって概念にいく-----認識法則、一般法則、弁証法、根本法則、認識論

|

認識としてとらえた下で3法則を理解する

本論

（一）有論

端初論

○何をもって学の端初となすべきか

内在的に端初を設定する

問題提起

直接的かそれとも媒介的か

直接性とともに媒介性を含まないものは天にも地にもありえない

直接性　　生まれ---媒介された

親　⇔　親　→　　子

媒介　|　　真の媒介---子供自身が自分の発展によって作られる

直接性　　自己媒介

外的媒介　　内在的媒介

媒介の二つの種類　①外的媒介、歴史的媒介
②自己媒介

○論理学

① 精神現象学からの媒介

② 有-------絶対的理念

直接性　媒介　　学の円環

措定

商品　→　資本

資本によって生み出された商品

最初のものが最後のものであり、最後のものが最初のものである

円環----学問にとって根本的

(1) 質

1. 有

有----無----成　　実在的

ものの見方　　発生　無→有

抽象的にある＝ないということ　　消滅　有→無

経済学批判　P44　国民文庫

「商品は小麦、リンネル、ダイヤモンド、機械等々の使用価値である（有）が、それと同時に、商品としてはそれは使用価値ではない（無）。---（中略）---その所有者にとっては商品はただ交換価値としてのみ使用価値なのである。だから使用価値としては、それはまずほかの人にとっての使用価値になら（成）なければならない。」

成→定有＝発生したもの

消滅したもの

2. 定有

過程あるところに産物あり

成　　定有　----静止的単純性

成のうちにないものは定有のうちにない

労働過程----生産物

静止的属性

過程のうちの属性が静止的に現れる

あるもの----------他のもの（弁証法的考察の次元ではない）

外的に見えるものの本質ととらえる弁証法

あるものの内に他のものがある----変化

あるものが他のものになること　//

あるものと他のものは別のもののように見える

しかし弁証法的にはあるものの中に他のものがある

あるものが他のものになる、相互に転化する
あるものが他のものになるのは、あるものの中における他のものの制約による

成----あるものの次元において<u>変化</u>としてとらえられ
|
成の具体化したもの
あるものの内在的限界↘発展
制限
あるものの質的限界----他のもの
内在的限界----質を保っているあるものの限界とぶつかること
他のものがでてくると、あるものがじゃまになるから制限となる
ある事物の<u>制限</u>が打破される----止揚
↓
(制限となった限界)
マルクス
ブルジョア社会----封建制の内在的限界を制限とみなす。
<u>制限となった限界だけを打破する</u>
資本主義も同じ、この歴史の弁証法は無限に続く

制限、限界、sollen----制限を打破する働き
|　　あるものの質的限界を制限として打破する働き（ヘーゲル）
制限なきもの（マルクス９
ブルジョア社会は自分自身を制限なきものとみる
限界→制限→sollen（無限の変化）

3.向自有

変化の中にあって、変化しないもの、真なるもの
↙
向自有
対自有
↙
原子、自我
↙　昨日の私、今日の私
我は我である、不変性----自我
主体　自立性を維持する働き
↙
一者（質が同じ）他の多くのものは一者に還元される、多くの一者
／／＼＼ 同質性
⇓
量

(2) 量、(3) 質量（限度）

量----量的変化（増減）の中にあって変化しないもの

↓

比、度

そのもの自体に固有の

↙

質量　das Mass

（限度）

質と量の統一　　第一巻の結論

最もむつかしい課題（ヘーゲル）

自然に対する事例ではなく量と質の相互の一般性

質によって量が変化する、量から質が変化する

スターリンの欠陥----弁証法----形而上学の反対

質によって量が変わるという弁証法がない

量から質はある

----------第８回----------

第２巻　本質論

有論においては矛盾というカテゴリーが出てこなかった----なぜか？

生命　→　死　　生命の変化、運動

死の萌芽

生と死は対立しない

矛盾しない

死が生とともに独立して対立しているわけではない

生の中に潜在的に含まれている

死が現れた時には生はない

有論----変化の論理であって矛盾のカテゴリーは成立しなかった

本質論----対立した二つの契機がある

人間は本質をいかにして認識するのか

冒頭　有は直接的なもの、知識作用は即且対自的に存在する真なるものを認識しようと欲するため、有に立ち止まらない有の背後のものが真理を形成するものだということを通じて有を貫き通す

有の世界----質量転換の論理

有の真理

変化しっぱなしのものに人間の知識は満足しない

本質へ向かう　　有の背後に本質がある

有から本質への道------反省的に認識する

有----現象とは言わない

現象とは本質がわかった上で現象といえる

本質がわかっていないから存在としか言えない

現象から本質を見出すその機能----反省

反省によって本質が見出される

有を前提にして背後にある本質を反省によって見出すのはいかにして可能か

----内在的に考察する----反省概念が変わってくる

人間の行為としてではなく、この行為を可能ならしめるものを考察する

（根拠）

本質はもともと有を前提として自分自身を示すことがなければならない

本質が有を措定して自分を示す----反省の法則

自分を示すために　　（弁証法）的方法

本質⇔有

本質　①有を前提する（前もって措定する）
　　②そのことによって自分を措定する　　統一が反省機能

(1) 自己自身における反省としての本質

1. 仮象

反省----Reflexion

本質は有の中に自分を示す----仮象が生まれる

仮象→一種独特の反省概念、これをヘーゲルは本質論で（拡大、これを発見したのは？）（マルクス）

王←臣下（物神性にも役立つ、反省の弁証法）

商品Ａ，Ｂ，Ｃ，Ｄ　　交換の矛盾を解決→金が貨幣となる

「金は生まれながらに貨幣である」―仮象（物神崇拝）

反省概念―単に対人間的な行為としてとらえるだけでなく、内在的な考察としてとらえることにより、独特な反省の概念をとらえる。（人間の反省+内在的考察による反省）

→ 純粋反省（措定的反省）―　一般の人間の反省の概念から明らかにしようと試みる。

2. 反省規定

我々の普通の反省―外的反省―外から内なるものを認識する。

本質をとらえるために比較を用いる。

どのように行うか

多様なもの（差異性）　比較　→ 共通なもの（同等性）　⇦　比較行為

→ （不等性）

我々が事物を認識する時、比較の行為として、差異性（多様なもの）の中で、同等性と不等性を見出し、対立に至るという外的反省の行為をよく見ると、（外的反省の行為は単に主観的な行為と見られるが、これを内在的に見ると）差異性は対立に移行し、結果として矛盾に陥る。―これを反省規定と名付ける。

差異性、対立、矛盾は反省過程である内在的法則

同等性と不等性は、どちらかかを本質と見るかによって、排除しあい対立する。→矛盾関係に陥る

区別

差異性（単なる区別）は、対立に移行する。対立は、結果として矛盾に陥る。

反省過程である内在的法則―発展の法則

区別→対立→矛盾（区別の発展）歴史的発展

区別のないところには対立も矛盾もない

区別は矛盾の即自体である

区別もまた矛盾である

矛盾―総体性の概念

自分の内に区別と対立を契機として含んでいる

総体性としての矛盾をとらえるためには、まず区別においてとらえなければならない。

（マルクス）使用価値と価値―①まず区別において把握される。

②いかにして対立的な位置に立つか

（価値形態）積極的と消極的

③両者が同じように積極的かつ消極的（交換過程）

「区別は対立に、対立は矛盾に到らなければならない」（経済学批判）

矛盾において事物は解決を要求される

矛盾がよって立つ根拠

3.根拠

a.根拠―Grund　（Grundlage―根底（根拠ではない））

矛盾が Grundlage によって崩れる

根拠はまず根底（Grundlage）である。

||　　本質は根底である

本質（Wesen）

今までの関係規定（反省規定）は、形式規定（マルクス：形態規定）である。

Foembestimmung

Grundlage―質料

Foembestimmung―形相

「黒人は奴隷である」

||　　一定の社会関係によって受ける規定→形態規定

質料としては黒人　　関係によって受ける規定

奴隷という規定はない

質料と形態を区別しないと、物神性が生まれる。（超歴史化）

（マルクス）資本の素材

質料的に言うと｛①労働対象　②生産用具　③労働力｝→資本の永遠化　素材にとらわれて混乱

↓

資本を資本たらしめるのは、これらの関係規定である。

これらの結びつきの社会的関係

矛盾は形式規定である

家 ―――→ 支柱（柱、土台）―――→ 重力（どんな家にも無関係、

その根拠　　その根拠　　これは単なる Grundlage ではあるが

Grund ではない

根拠―形相と質料（絶対的根拠）

b.根拠の結果

積極的な意義と限界

矛盾は、よって立つ根拠によって解決される。

（実在的根拠）

根拠の形式主義（Formalismus）

電気現象 ⇄ 電力

根拠　　これは根拠ではない

同じ内容のものを、根拠と根拠づけられたもので入れ替えている―形式主義、同語反復

パーティの力 ⇄ 多くの人が集まった―同語反復

自然――世界

根拠　　根拠づけられた自然

このようなとらえ方では世界を多様なものとしてとらえることはできない。

世界がどうして多様なものになるかは偶然的となってしまう。

→条件（世界を多様たらしめる条件）

根拠は完全な根拠でなければならない

完全な根拠

c.条件（制約）

A ⟶ a

根拠　　b　　結果（根拠づけられたもの）

条件　　これを可能にするにはｂという条件が必要

↓

付帯的、受動的

B ⟶ b

a

条件

この条件ｂを考えてみると、A→ａにとっては条件であるが、B→ｂにとっては本質的であり、かえってａが条件となってしまう。何が条件で、何が根拠づけられたものかは規定できない。相互的。すべてが条件、すべてが根拠。どれが条件で、どれが根拠かは相対的。

事柄（Sache）のあらゆる条件が現存する場合には、事柄は現存せざるをえない。

↓

Existenz 外に現れる

↓

根拠づけられた存在

根拠が現存するためには、条件の総体の必要性 ⟶ 現象

(2) 現象

1. 現存

現存するものとは何か―物（Ding）

根拠と根拠づけられたものが具体的な姿となってあらわれる。

物――自体（カント）物の性質の抽象化

性質（特性）―ある物が他の物と関係する場合の機能

自体とは無関係→経験主義、ロック

熱素、色素―性質の質料化（実体化）

物の領域では性質を主に考える

しかし、現象とは他の物との関係であり、他の物によって変化する。

したがって、物の自立性の否定、独立した質料（熱素、色素）の止揚。

2. 現象

現象の法則（現象の中にあって変わらないもの）

法則―現象の一部分、現象の中にある変化しない部分、現象の静止的反映、

（現象と別の内容ではない）、法則とは持続的現象に他ならない。

現象―広い領域、豊富、主導的

根拠と根拠づけられたものの関係

同じ内容を二重化する

同じ内容の側面を全体と考える。法則の姿、現象の姿は、それぞれ部分である。

3. 本質的相関

全体――部分　　（静止的、平面的にとらえる欠陥）

（内容）　（形式）

総体性ではない

動的にとらえる

力　と　発現

<u>発現を可能ならしめる全体が力である</u>

誘発する力

（生産力の概念）

誤ったとらえ方―生産力は労働手段と労働力であり、労働対象は含まれない。

弁証法的とらえ方―生産が発現して生じたものが生産物である。生産物を生み出す総体が生産力を形成する。能動的なものと受動的なものの全体が力である。例えば、石を投げて波がおこるとする。この場合、石を投げる力（能動的な力）と、波をおこす水の性質（受動的な力）の両者によって波がおこる（力が発現する）のである。

力は発現によって、力たるを示す。

力と発現

↓

内と外

内なるものと外なるものの一致＝現実性

(3) 現実性

1. 絶対者―現実性の最初の規定、汎神論の立場を現実性として表明する。

||

現実性

絶対者の開示（止揚、措定）　絶対者は規定することができない、限定されない

|

絶対否定性　あらゆる否定は肯定である

人間は人間である―人間以外のすべてのものではない

（肯定）　（否定）

すべてのものが絶対者である（あるものだけが絶対者にはならない）

絶対者は否定性なるがゆえに総体性である（すべてである）

すべてを措定する

絶対者は属性によって現れる

様相―属性のもとで現れた絶対者が自分自身を示す

実体―属性―様相（スピノザの実体の概念）

いかにして現実性が絶対者であるかを示す

2. 現実性

（現実の）存在―ただの存在のように見える（真の現実的存在ではなくて）

↓

偶然性→後に必然性へ展開する

これが現実の姿であり、現実性の法則

（マルクス）商品の交換―はじめは偶然である

偶然的存在の分析

偶然的存在＝可能性であるにすぎない存在

（あるべくしてある存在ではない）

外なるもの　内なるもの

あるものを他のものへ変える

他者への可能性、他者へ変化する可能性

可能性―①ある事物の本質（内なるもの）
②他のものへそれを変える

偶然性―自分の原因によって動くのではなく、他のものによって動く

原因が外にある

外的必然性―偶然性が必然性の形式をもつとしてもそれは外的必然性である

形式的必然性　（形式的）

（形式的可能性）

（形式的現実性）常に反対が可能であるような現実性―偶然性

実在的（相対的）必然性―実在的な可能性を持っている必然性

誤った考え方

（マルコヴィッチ）

実践の場面では反映は成立しない

現実にないものを予測する　　現実にあるものを反省する

この間違いは

将来の様々な現実性（可能性）が人間の頭脳に反映されることを忘れている

現実性―多様な可能性を含んだ概念である

Wirklich（現実的）であるところのものは、Wirken（働く）することができる

Wirklich は Wirken によって現実性を示す

本源的な現実概念は、現実的なもの―マルクスの生産である（許萬元）

（概念的把握の論理）

Wirken することのない Wirklich は空論である

実在的可能性―現実にあるものを Wirken する可能性

現実にものを生み出す可能性

絶対的必然性→絶対的関係

3.絶対的関係　本質論の最後の締めくくり、本質に即した関係（現象に即した関係ではない）

||

現象における本質的関係

実体性―あらゆる偶有性の総体　必然性を考察するには、その実体を調べる

（レーニン）「原因を追求する認識は実体まで進まなければならない」

因果性

実体――――――偶有性　　全体と部分

は　　を　　↓動的表現　　↓

原因として―――結果として生み出す　　力と発現

因―果―果 } 悪無限に陥る

果―因―因 } すべてのものは原因と結果にきちっとわけることはできない

↓

非現実的な見方

どう見るのが正しいのか

あるものが真の原因となるものは、その結果である

結果が原因の原因である

人をだます（因）――（果）だまされた人間がいてはじめて言える

（道徳的悪）　　（因）二度だまされた人間は悪である

一度だまされて反省して、次にだまされないようにしていく

原因と結果とは交互（相互）作用である

交互作用―因果関係より正しい

現実をより深く全面的にとらえている

原因は相互にある

交互作用ですべてがとらえられているわけではない

（ヘーゲル小論理学　終わり）交互作用で見ることは、再び媒介の要求を満足させない。空虚な事実を述べているにすぎない。現実をとらえるには不十分である。

（レーニン）交互作用だけでは空虚である。

資本家――労働者　（相互に前提しあい、相互に排除している。

交互作用　　それだけでは不十分である。）

問題は交互作用のよって立つ根拠、

関係そのものを生み出すもの（基礎）が何であるかを追求しなければならない。

労働者の労働そのものが、資本関係、自分と資本との関係、労働者と資本家の関係を再生産している。

交互作用は全面的ではあるが、まだ空虚である

交互作用の根拠（基礎）―→概念

第３巻　概念論

概念一般（ヘーゲルの概念の本性）

二重 { 主観的に事物を分析して、個別的なものから普遍性を見出す―なぜか
この一般的（普遍的）なものは事物のなかにある

概念

事物関係そのものが概念的存在である

事物が個別、特殊、普遍をもち、互いに個別から特殊、普遍へと移行しあっている

個、特、普――概念の契機

どういうことか

概念的存在の客観的根拠――スピノザの実体

客観的実体

概念―実体力、必然力をわがものとしたもの

自由の領域、主体の領域、自由な主体

大人の主観―客観的主観性

主体の論理学

自由の領域―普、特、個

全く個別的な人間は、個別的なものにのみ関係する
個別的欲望―個別によって支配される
普遍的認識―個別を支配する
事柄を変える―高い領域―実践の領域を含む

カント（認識論者）
概念と自我
概念をもつ（haben）←誤りである
外的結びつきになる
自我が概念として働いている
概念の構造は自我と同じである
カント　自我の中に普遍性を考えた
自我の思惟―必然性―客観性
まだ客観的ではない（ヘーゲル）
カントへの批判
①概念の前段階―感性、直観
これを前提した概念は心理学的である
悟性
ヘーゲルは概念の前提は、有と本質という客観的カテゴリーである（主観的意味ももってはいるが）
有と本質の統一（真理）が何であるか→概念
単に主観的なものではない
②概念―カテゴリーにすぎないから、素材から分離されている
空虚な形式、概念から客観性へ移行できない
③真理―カントの客観は主観的なもの
カントの真理は真の真理ではない

論理学の形式―内容を含んだ形式
アリストテレス　思考形式を見出した功績

連関と価値が見出されなければならない

概念の区分（それ自身客観性をもっている）
①主観性（主観の客観性）
②客観性（客観がいかに概念的であるか）
③理念

----------第９回----------

ヘーゲル論理学　３巻

有―本質―概念

（レーニン）「物事を認識する順序」

現象―実体―本質　　物理学の三段階論（武谷三男）

最初に現象がくることはできない

現象がわかっている場合は、その本質がわかっている必要がある

ヘーゲルは何の現象かがわからないものとして有をあげた

実体の概念が不明瞭

三段階が歴史的なものか認識論的なものかはっきりしない

(1) 主観的概念（主観性）

1. 概念―人間の行為としてのみ理解してはならない

弁証法の法則は内在的考察から出てくる

個別から特殊を経て普遍性を取りだすという主観的行為とのみ解してはならない

個―特―普

あらゆる事物は個別的なものから特殊性を経て普遍的なものに高まっていく

また普遍的なものが特殊性を通して個別的なものとして現れる

事物には個別、特殊、普遍が内在している

2. 判断
- 1. 定有の判断　――個別
- 2. 反省の判断
- 3. 必然性の判断
- 4. 概念の判断　――普遍

（2.〜3.）特殊

↗ 認識の深まりを意味している

自然弁証法（下）Ｐ305

（エンゲルス）「この判断は思考法則ではなく自然の法則にもあてはまる」

絶対的自然法則

定有（個別）―摩擦は熱を生む（実践的に知られている）

特殊―――――力学的運動は熱を生む

普遍―――――運動の各形態はすべての他の形態に転化しうる

概念の論理構造によって叙述が行われる

（ヘーゲル歴史哲学）個別―アジア　一人のものが自由

特殊―ギリシア　若干のものが自由

普遍―近代　すべてのものが自由

↓ 歴史の法則

個―特―普の円環を形成している――概念構造→推論

3. 推論

すべての人間は死ぬ　　普
ソクラテスは人間である　特
ソクラテスは死ぬ　　個

推論―普、特、個を運動している
推論そのものの運動から概念の契機（個、特、普）を取り出した
全称推論―すべての人間は死ぬ――前提が問題となる
↓
全称が成り立つためには帰納法がなければならない
すべてに達することはできない
帰納の欠陥を補うもの
↓
類推（理性の本能）
昨日太陽が昇った。今日も昇るだろう
↓
必然ではない

実体
この実体がわかれば必然性がわかる

(2) 客観性

1. 機械的関係――独立で外的、中心性、外的関係、依存するものが外的
2. 化学的関係――中性物、還元（外的なものに依存）、内的関係
3. 目的的関係――機械的、化学的を止揚している

客観―主観から独立にあって、主観がそれに依存するもの
機械―食べる
化学―骨の消化
目的的に行われている

主観的目的
関係
客観
わがものとする

手段（としての客観）―目的が客観を掌握したもの
外的客観―手段以外の客観
実現された目的―客観（手段）と客観（外的客観）をぶつけながら、
自分の目的だけを実現する（自分は過程の中に入らない）
理性の狡知

人間は発達しても人間以外のものにはならない
文明が発達しても人間自身を超えない。その範囲内で行っている

(3) 理念

1. 生命―以上を端的に表したものが生命である

|

すべてが目的で、すべてが手段である

すべてが統一されている

理念の直接態、Idee の最初の段階

魂と肉体の統一

自然的生命のことではなく、生命一般のことを指す（精神的生命、自然的生命）

生命の契機

感受性―理論的能力の特効薬
反応性―実践的契機
再生産

|

生命過程が生じてくる

類の過程―生命の頂点

個、人間は類的存在である

個体としては死ぬが、類としては生きる

個別的なものが同時に類的存在となると精神的機能となる

（フォイエルバッハ）

悟性（神は全知なり）
愛（神は愛なり）
意志（神は全能なり）

人間の中の類―なぜか

人間は愛のために死ぬことができる

類としての力（愛-個を超える力）が

個を殺す、

人間の愛としての本質を表現したもの

神―人間の類的本質を表現したもの

人間―類が自分の中にありながら自立化している、自分を対象にする

個人的な力が個人を殺すことはできない―それは保存するだけである

（マルクス）「労働こそ人間の類としての最も根源的な機能である」

2. 認識

対象を客観化する作用がなければ認識は生まれない

主観、客観の分離―原始分割

（対象）

客観から主観が否定されて分離される

人間が客観と主観を分離する前に、実際に人間は分離されていた

目標は両者の統一、分離の克服である

その方法として二つある　認識（広い意味）

理論（真理）
実践（認識論的概念）

ヘーゲル以前にはなかった主張

生命―認識―絶対理念という進展

（松村、見田説）―生命というカテゴリーは論理的カテゴリーにならない

（レーニン）―生命を置いたのは天才的、

生命は特殊なカテゴリーではなく一般的なカテゴリーである。

必然的前提である。

商品交換―抽象的・一般的契機、

カテゴリーとしては一般的だが、現実の中では特殊なものとして現れる

（ヘーゲルの欠陥）―実践的概念を認識論的にのみ解した。

ヘーゲルの実践―理論を絶対的真理に高めるための契機

絶対的理念―理論的なものと実践的なものの統一

実践を止揚して理論を取り入れたもの

マルクス主義では、実践が契機ではない。ヘーゲルと逆になっている。

a．理論―分析（経験論）玉ねぎの皮をむく

総合（合理論）

分析のすじ道　個　→　特　→　普　　概念の契機の範囲内を動いている

↓中にある　　自立していない

総合のすじ道　普　→　特　→　個

（定義）（分類）　（定理）―スピノザの方法

個の中に普遍があるという前提がなければ、分析はありえない

実際は分析的かつ総合的方法のみがありえる―絶対的方法

単純にこれだけ取り出しても成立しない

分析的方法が成り立つためには総合的方法が前提される

普遍的なものが即自的に個を含んでいなければ最終的に個まではいかない

分析的総合、総合的分析

（レーニン）「分析と総合の統一」

定義　→　類　＋　種差

（普遍的なもの）（動物）（理性的）

人間は理性的な動物である

人間は初め動物であった

理性（労働）によって人間となった

定義を生むためには分析が前提されていなければならない

分析は本質的に総合である

b．実践

理論から実践への移り行きの論理

実は主観的なものが客観的なものから内容と規定を受け取る

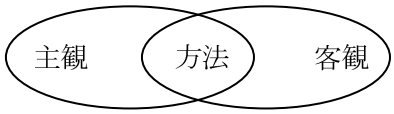
理論（主観）が客観を見るとき、非現実性（仮象）として眺める自分こそ本質的である。

あるべき姿ではない―――現実を変えようとする意志となる

理論によって現実の本質を把握するなら、これを変えようとして実践的意志となる
（レーニン）「理論と実践の結びつきは必然的である」
実践の矛盾―現実はあるべき姿にあってはならない
欲求不満の立場、悪無限、青年の立場、
老人―現実こそ発展の結果、あるべき姿として認める
邂逅的、ふりかえる、実践はない、思弁的立場―老人の立場
実践の結果生じた現実はあるべき姿である
実践を止揚したもの―絶対理念―絶対的現実を前提している

3.絶対理念

絶対　理念――――その下に何が理解されているか（マルクス、レーニン）
最も唯物論が多い
ヘーゲル特有　観念論の原理
弁証法的方法―今まで述べてきたことを方法的にまとめあげる
絶対理念―真理、哲学の対象、万物の普遍的あり方、絶対的方法、
外的反省を取るのではなく、事柄自身に即して内在的方法を取る
普遍の方法―認識の道具と見なされる
なぜ方法が道具として可能か
依拠
主観――――方法　　客観　　←この捉え方は間違い



←方法は主観であると同時に客観に属している

方法は道具である前に客観的法則の反映でなければならない

方法の契機

端緒――――進展――――終局
（否定、歴主義的）　（総体性）　ヘーゲルにとっては実践の場ではなく理論的認識の場である
全体の成果
過去のものを自分の中に位置づけて体系化する
主体となる、独立する段階
事物は総体性に向かって発展している
学は円環である
絶対理念は最初にあり、前提されていて、根底にある

●マルクス**「経哲草稿」**

マルクス―トリル市に生まれる、フランス啓蒙思想の急進的な気風が影響を与えた

マルクスの父―ユダヤ教を捨ててプロテスタントに変わっている

父がマルクスに急進的な形で影響を及ぼしていた

文学青年、文学者への挫折

法学部、ヘーゲルを学び哲学論文を書いた

ブルーノバウアー、ヘス（ヘーゲル研究者）―マルクスを恐れるようになる

ライン主筆―ヘーゲル法哲学に基づいて反動的思想と対決する

ヘーゲルの限界点（法哲学）を知る

パリ、独仏年誌―エンゲルスと知り合う

ドイツイデオロギーの批判―マルクス主義の骨格

｜前提

「経済学・哲学草稿」（出版していない、レーニン没後発行）

マルクス主義の形成過程を知る上に重要な本

第２草稿が抜けている

第１草稿

国民経済学の忠実な抜粋

労賃―資本の利潤―地代

三つの事実を国民経済学自身によって語らせる

労働、資本、土地

①労働は資本と土地から分離させられて行っている

労働者―労働するだけの商品人間

②労働者と労働自身（資本家）とは反比例関係にある

生産力（富、文明化）が増大すればするほど労働者は無力になる（人間は動物化する）

③資本蓄積の結果、土地所有者は資本家の手に落ちていく。

社会全体は労働者階級と資本家階級に二分されていく

（後半）

疎外された労働（編者によってつけられた）

国民経済学をありのままに見てきた

問題なのは概念的把握である（国民経済学はしていない）

Begreifen

哲学的問題提起

哲学の課題は、あるところのものをBegreifenすることである

国民経済学は事実をあげて、そのままにしている、Begreifenしていない

Begreifenするやり方

労働者―労働―生産物

主体

主体の性格を認識するために結果から分析する

生産物が労働者から疎外されている――生産物の疎外

↓

生産物を生み出す労働力は疎外された労働でなければならない――労働の疎外

人間が類（労働）から疎外されている

労働が他人のものになっている

自然は労働する人間と一体のもの―しかし人間が労働から分離されているから、

人間は自然から疎外されている

人間からの人間の疎外―私的所有

疎外された労働→私的所有―　一面的

私的所有を根拠にして疎外された労働をとらえる―第２草稿（なくなっている）

第３草稿（第２草稿の付論）

ヘーゲル弁証法一般、哲学一般の批判

ヘーゲル哲学の秘密―精神現象学―真の誕生地（全秘密がある）

対象変革と主体の変革を一致したものとして具体的にとらえる

実践論の立場から、これをとらえる

絶対知（結果）から見れば全体が明らかになる

ヘーゲルの労働は、知識を生み出す精神労働でしかない

主＝客（対象）

主体（実践的主体）は客体を措定する

客体は主体化された客体である―これは正しい

ヘーゲルの客体はなぜ観念的なものになるのか

この主体は自己意識でなければならない

｜

観念的主体―観念的客体しか措定しない

ヘーゲルの措定したものは観念的なものであるが、対象の疎外が現実の対象の克服ではなく、

対象一般の克服でしかない

主体を自己意識に据えたところにこそ、ヘーゲルの転倒がある

現実の主体　　（マルクス）観念の代わりに物質を置いたのではなく、主体を変えた

実践主体

①自己意識の代わりに、大地の上に立った現実の人間を主体とする

→現実的なものを生み出すことができる

対象的な存在が対象的なものを左右することができる

②Leiden（受苦）苦しみを受ける

対象から受ける―苦しみと主客の分離

Leidenshaft　情熱的

人間は受苦するから情熱的、実践的となる

③人間が人間的なものを実現する―自然主義と人間主義の一致

区別―――対立――――――矛盾

実現する　　疎外

äusserung　Entäusserung　　Entfremdung

共産主義は徹底した自然主義―唯物論の理想

共産主義は徹底した人間主義―観念論の理想

唯物論と観念論を統一した主体

現実の主体が否定されているが故に情熱的になる

それが人間化と自然化を実現する

共産主義―実践的唯物論（ドイツイデオロギー）

----------第10回----------

マルクスによるヘーゲル哲学の唯物論的転倒

絶対者、神、理念　の代わりに物質を置いたのではない（18世紀的唯物論）

客観的な世界の原理をヘーゲルの主観的な原理と取り換えたのではない

主体の面における置き換えこそ、マルクスが行った

ヘーゲル精神現象学

感覚から出発―対象を変えることにより自分を変え、

自分を変えることにより対象を変える

↓

労働の論理→人間の本質（精神現象学の偉大な側面）

自己意識＝主体（観念的なもの）

前提

主＝客

耳＝音　耳の本質は音である

耳は主体化された音

耳は対象化された音

目＝光　光は耳の対象ではなく、目の対象である

自分自身の本質に一致したものだけが対象となりうる

（主体）		（対象）	
感覚	＝	感覚的なもの	主体と客体の一致
悟性	＝	悟性的なもの	
理性	＝	理性的なもの	

（主体）　（客体）

自己意識＝対象化された自己意識（観念的対象）

実践主体そのものを現実の主体に置き換える（マルクス）―実践的唯物論

現実的
物質的　主体が物質界を対象とすることができる

労働＝人間の類的行為

実践的唯物論の確立―ドイツイデオロギー（マルクス27歳、エンゲルス25歳）

若き日のマルクスの総決算

（アルチュセール）マルクスの前期、後期の分離

●「ドイツイデオロギー」

1924年　リャザーノフ（ソ連）発行　ページ数から編集

1930年　アドラッキー版　　内容から編集→訂正

フォイエルバッハへのテーゼ

　フォイエルバッハ論で修正して適用

青年ヘーゲル派　　右派　反動

　　中　　哲学史

　　左派

　さまざまな預言者

　　カール・グリュン―フランス社会主義のドイツへの適用

第1部　青年ヘーゲル派一般への批判（マルクスの自己批判）

　　フォイエルバッハ、ブルーノバウアー

第2部　真正社会主義への批判

　　カール・グリュン

第1部　フォイエルバッハの部分が最も積極的

　　国民文庫　この部分だけ

　青年ヘーゲル派（左派）の欠陥

　　思想革命に終始した

　　古い思想に対して、新しい思想を対置させる

　　フォイエルバッハ―神の代わりに人間を原理として立てる

　　ブルーノバウアー――歴史（実体）の代わりに自己意識

　　シュティルナー――外的権威に対して、自我を立てる

　　「我の上に無を置く」（唯一者と所有）

　　これにより古い思想は壊れるかに見える

　　頭だけ切り変えるから、現実はそのままある

　　現実を新しい観点から解釈を変える

　「経哲草稿」Ｐ176

　　「現実的私有財産制を止揚するためには、現実的共産主義運動が必要である。」

　思想革命論は観念的である

　ヘーゲル左派は急進的であるにも拘わらず保守的である。

現実を実践によって変革する―共産主義―実践的概念

思想革命においては思想さえも変えることはできない

↓

社会の存在によって規定されている

共産主義の定義　国民文庫Ｐ68

共産主義とは我々にとって理想の状態ではない。

共産主義とは我々にとって現在の状態を止揚する現実的運動のことである。

↓

共産主義の実践的概念

｜

実践的唯物論

天上から地上へ降りてくるのではなく、地上から天上へ上る－唯物論

↓

以上の唯物論はフォイエルバッハによって確立されたものである

｜→歴史の領域まで徹底しなかった

フォイエルバッハと徹底的に違ったもの

実践的立場

フォイエルバッハ－正しい意識をもとうとするだけ

ヘーゲル弁証法の本質　P48

フォイエルバッハの欠陥

フォイエルバッハの立場－｛直接性から出発する／媒介の立場を捨て去る

現実的なものは直接性とともに媒介性を含むものである（ヘーゲル）

感覚の前に与えられたものは絶対的なものである

直接知＝感性の立場

将来哲学の根本命題

38 節「直接的なものこそ真なるものである」フォイエルバッハ

37 節「直接に確実なものは感覚の対象であるものだけである」フォイエルバッハ

フォイエルバッハは対象を直観の形式よって受け取っている（マルクス）

｜

直接知

ドイツイデオロギー　P83　国民文庫

直接性は実践によって媒介されている

直接的なものも、産業と交通によって自分の前にある

実践

直接性と媒介との統一

‖

実践的唯物論

マルクスの弁証法の特徴は実践的唯物論なしには理解できない

実践的唯物論の立場から、新しい歴史観の確立　P72

個々人の物質的生産から出発して経済的生活から意識を説明する

実践　　市民社会

↓解剖

資本論

一切の歴史の根本条件――――物質的生産

第一次的行為

人間が動物から区別される本質は何か　P 42

思考―――ヘーゲル
（知的生産労働）
生活手段の生産―マルクス
（物質的生産労働）
} 動物から区別する
歴史的始まり

法哲学　4 節「人間は思考によって動物から区別する」

実践的唯物論だけがフォイエルバッハ、ヘーゲルと区別する

○フォイエルバッハテーゼ

主要テーマ　実践的唯物論の確立
従来の唯物論は実践を把握していない

第一テーゼ　実践的主体が欠けている
批判的立場がない
} （唯物論に対する批判）――観念論者が行った

第二テーゼ　思考が実践から離れるなら現実的真理となりえない
（力）

第三テーゼ　労働の論理、環境の変更と自分の変更は一致する
環境の変革と人間的活動（または自己変革）との合致は、
革命的実践としてのみ把握される　労働の論理

第四～第七テーゼ　フォイエルバッハの宗教批判の制限性―現実に対して無頓着

第八テーゼ　あらゆる社会的生活は本質的に実践的である
すべての理論の合理的謎をとくカギは実践の内にある

第九テーゼ　ふつうの唯物論の立場は市民社会の立場である

第十テーゼ　実践的唯物論の立場は人類社会または社会的人類の立場である

第十一テーゼ　哲学者は世界を様々に解釈してきた。
肝心なのはこれを変革することであろうに

ドイツイデオロギーの中には、これら 11 テーゼが活用されている

ヘーゲル弁証法の転倒は実践的唯物論によってなされる

現実に対する実践的態度がいかに徹底できるか

ヘーゲル　歴史の絶対的完成

マルクス　現状を絶えざる批判の中においやる
歴史主義の立場が徹底される―エンゲルス

エンゲルスにおける歴史主義の立場の確立

● **「反デューリング論」**―正式タイトルではない

“オイゲンデューリング氏の科学の変革”　1877/1～1878/8

合同社会民主党　機関誌　「前進」連載

第２の序文　ヘーゲル弁証法を救い出した人―マルクスと私

やむを得ず書いた本

デューリング（盲目）　カントから社会主義へ転身

社会民主党の中に分派を作るに至り、批判を開始した

博学的天才、哲学、経済学、社会主義

↓

批判による積極的見解の対置

序論

１篇　哲学

２編　経済学

３編　社会主義

序論

１章　空想から科学へ

２章

空想から科学への転化については、弁証法が大きな役割を果たしている

弁証法の歴史　岩波Ｐ36～Ｐ38

人間は世界を認識しようとするには何かを認識する前に、運動、連関している有様を認識する

（実体）　①　ヘラクレイトス

エンゲルス：歴史主義的　ヘラクレイトス：弁証法の父

全体から切り離して個々の部分を認識する―――自然科学、歴史研究の任務

②形而上学的考察

矛盾の中に迷い込む

③弁証法

自然科学者は自然に強制されて弁証法的立場になる

意識的に確立したのがヘーゲルである

観念論的

弁証法は当時の三大発見によって基礎づけられた

ブルジョア社会の科学的解明

マルクスの二大発見　①唯物史観――歴史全体の理論―普遍

②剰余価値説―ブルジョア社会の解剖の武器―特殊

第１篇　哲学

デューリング―思考形式から世界を構成する

自然哲学　「原理は研究の出発点ではなく、研究の成果である」エンゲルス

弁証法は定義を先に置かない

弁証法は原理を先に置かない

原理

デューリング　―――　この逆を指摘するだけではなく

（ヘーゲル）　　これがいかに可能か

世界　　思考と存在との同一性

岩波　Ｐ59　思惟そのものが自然の産物

人間そのものが自然の産物　　思考と存在が一致する

①意識―物質が根源的である

②物質の発展に対応する人間の認識は相対性を持っている

③世界の統一性は物質の中にある

④時間と空間は物質の存在様式である

⑤物質と運動とは不可分である

社会哲学

永遠が絶対的真理を表現する　デューリング

すべてが歴史的である　エンゲルス

量との関係は歴史的所産である

真理と誤謬は絶えず転化する

相対的真理（エンゲルス）　　一面的真理（レーニン）

弁証法―最後におかれている―原理

量と質、否定の否定、―デューリングへの反駁

矛盾

これらの法則はすべて何物も固定化せずに運動連関の中にもたらす点にある

エンゲルスの特徴

形而上学→弁証法

固定化

連関から分離

ヘーゲル　悟性―弁証法―思弁

端初―進展

弁証法＝歴史主義　　エンゲルス

第二編　経済学

広い意味―歴史全体

狭い意味―ブルジョア社会

経済学―歴史的科学
　　歴史的に変化する材料を取り扱う
デューリング　暴力を絶対的なものと見なした
エンゲルス　　真の暴力は経済的なものである
　　暴力が革命的なものを演じる
批判的歴史観　マルクスによって書かれた

第三編　社会主義
　近代社会は理性国家から、その矛盾として現れた
　空想性の根拠―ブルジョア社会の犠牲
　国家、家族、教育―未来の社会
　　国家の消滅

----------第 11 回----------

●「自然弁証法」

エンゲルス　自然弁証法　1875～1883

現状を絶えず止揚する運動―実践的唯物論

現実は止揚する可能性を含み、かつ必然性を含んでいる

歴史主義弁証法の確立―反デューリング論、自然弁証法

自然研究の立場において、歴史主義を確立する

覚書と断片　ノートのまま

没後 30 年　ソビエト 1925　出版

なぜ出版されたのか

反デューリング論において弁証法の例をあげた

機械論学派

エンゲルスの叙述は近代学派（自然科学）の立場から叙述できる

マルクス主義の理論戦線をリードしていた（科学者からなっている）

反論　デボーリン派（エンゲルスを持ちだして批判）

ヘーゲル

自然弁証法の発掘

10 年間の論争　反論（1 年）　レーニン哲学ノートの発掘

ヘーゲルのロシア語訳

ミーチン（レーニンを持ちだして批判）

スターリンもデボーリンの影響の下にある

レーニンは自然弁証法を知らなかった

唯物論と経験批判論において同様な結論

自然弁証法　一つのまとまった本ではない

二つの部分

論文

覚書と断片

論文

1　序論

2　反デューリング論への旧序文（弁証法について）

3　心霊界での自然研究

4　弁証法

5　運動の基本的諸形態

6　運動の尺度

7　摩擦

8　熱

9　電気

10　サルが人間に転化するにあたっての労働の役割

「労働の役割」の歴史的実証

↑

人間の本質（マルクス）

1.序論

近代の自然研究

古代人の直観、アラビア人の発見

以前の自然研究は断片的なものであった

・近代の自然研究は体系的で全面的な発展をなしとげた

理論的、科学的

・偉大な時代　ルネサンス―ブルジョア社会の生成期

自然研究の開始

第一期　素材の発見　天体の力学　地上の物体

力学　ニュートン　自然の絶対的普遍性

自然観の特徴

運動の原因は言わない

一度与えられれば永遠にその状態にとどまる

18 世紀初めの唯物論もここに当てはまる

これを打ち破ったもの―近代の弁証法の開拓　カント

カント　宇宙の発生史―画期的なもの

エンゲルスの結論（カントの著作からの）

もし地球が生成したものなら、地球上の動物等も生成したものである

自然はあるのではなく、生成し消滅するのである

Sein　　Werden

存在　　エンゲルスの歴史的自然観

新しい自然観は基本的な点では出来上がった

固定化したものはすべて解きほぐされ

永遠したものは、うつろにゆくものになり

自然は永遠の流れに追いやられた

自然は最小のものから最大のものに至るまで、永遠の生成と消滅の中にある

エンゲルスの結論

自然史

天体史―生物史―人間史

――太陽系の死

思考する精神の存在は物質の発展の本性である

歴史主義を自然の内に確立する

2. 反デューリング論への旧序文

①経験的自然研究　　材料蓄積

個別的、特殊的

②理論的自然研究　　体系的、内在的考察

理論的思考の段階

弁証法なしにはやってゆけない

弁証法と同意味

鍛えるには哲学史と論理学が不可欠

育てるには

アリストテレス、ヘーゲル

弁証法を研究した思想家

現代の自然科学は意識せずに弁証法的になってきた。

しかし依然として形而上学に逆戻りしてしまう。

自然科学の救いの道―形而上学から弁証法へ移行する。

弁証法の二つの形態―　古代ギリシア／ヘーゲル

逆立ち　合理的核心―マルクス

自然科学における逆立ち―熱素

3. 心霊界での自然研究

自然科学者が経験を通じて神秘主義に至った。

催眠

感覚の独特な過度の興奮性／受ける側の信頼　これがないとかからない

心霊の実験を行い反論する

自然科学から神秘主義に落ち込むのは、哲学的理論ではなく

思考を信用せず、経験主義に陥るためである

二つの関連を見抜いたり／二つの事象を関連付けたり　するのは理論的思考なしにはできない

弁証法を軽視すれば罰なしにはすまされない

理論的思考

4. 弁証法

連関の科学としての弁証法を形而上学と対立させて考察すること

形而上学→弁証法

固定化　　否定、歴史的運動

自然、人間社会の歴史から弁証法の法則は抽出される

弁証法の法則―歴史の法則

ヘーゲルの論理学の三つの法則を引き出す

1. 量～質　（一方だけに理解するとスターリンと同じになる）
2. 対立物の相互浸透
3. 否定の否定　（全体にも通ずる）

われわれはここで弁証法が自然の発展法則であり、

理論的自然研究に有効であることを確認しようとする

弁証法のハンドブックを編もうというのではない

われわれはこれらの内的連関にまで立ち入るわけにはいかない

自然弁証法の制限―バラバラな三つの法則の例証、その有効性を示す

↓

例証主義

実際に取り扱っているのは　1. 量～質　だけである

5. 運動の基本的諸形態

運動の哲学的概念（最も一般的な意味での運動）

物質の存在の仕方

唯物論の原理―物質

哲学的物質概念に結びついた運動

物質に内在する属性としての運動

位置変化～思考まで、あらゆる変化と過程を含んでいる

全自然史の別名―運動

連関―運動の一種

物体相互の連関―相互作用―運動

弁証法は連関の科学―運動

運動の絶対化（エンゲルス）　他のものは運動の副産物

運動の形態

低いものから高いものへ

自然の歴史主義

力学―位置変化

物理学―分子運動

化学―原子運動

生物学―

ヘルムホルツ　引力の考え方―一面的

牽引―反発　　両極

あらゆる運動に貫かれている

この基本的矛盾の展開

エネルギーは反発運動である

反発こそ能動的である

革命的

いつか静止するという可能性―弁証法にとってはありえない

遠い未来のことは、その時の現実が措定する

運動という抽象―われわれの知性がやっているのではない

↓ 現象自体が一つの形態から他の形態へ移行することによって、

客観的抽象　現象自体が述べている

↓

エネルギーの転化によって証明される

熱―電気―磁気

覚書と断片

科学の歴史

唯物論的自然観―ギリシアにおいてとっていた

現代自然科学も弁証法的自然観を持ってきた。

その根拠は三大発見にある

- エネルギー転化―運動形態の固定化は打ち破られた
- 細胞の発見―生物が発生し生成する秘密を暴いた
- 進化論―様々な生物がいかに発生するか

これらの発見によって、すべて証明されたが、生命の起源が残されている

唯物論的自然観　P268　国民文庫

自然をあるがままにとらえる

自然に対する内在的態度―唯物論と一体

自然科学と哲学

哲学的方法の二つの形態

- 弁証法―カテゴリーを一つの極から他の極へ展開する
- 形而上学―固定したカテゴリーで事物をとらえる

事物の学（静止）

運動の学

両極性の普遍性

磁石、電気、分極作用、遺伝と適応、化学の反発と牽引

どれを肯定と見、どれを否定と見るかは実践によって確かめられる

◎すべて異なるものは中間項を通じて転化しあう。

いきなり飛び越えて、物を関連させてはならない。

抽象的同一性

区別を廃止した同一性　　どこにもありえない

同一性の中に区別がある　昨日と今日の私　　日常生活の中ではまにあう

限界を越えれば妥当性を失う

弁証法的論理学

自然と精神との統一

自然は理性的である（反理性的ではない）

理性は自然的である（反自然的ではない）

思考の歴史

歴史的なものと論理的なものとは一致

一般法則の方が個別的なものより具体的である

悟性と理性

質的に人間のみにある

動物にもある　　概念、弁証法的思考

分析、総合

質的には人間と動物は同じ

量的に異なる

判断

認識法則であると同時に自然法則

必然性の証明は実践である

因果性の観念は実践から生じている　P 314

思考作用の基礎は実践である　P 317

人間の思考を成長させるものは実践―自然を変革する活動

悪無限　　真無限　　―有限と無現の統一

世界の歴史

悪無限―単なる繰り返しではなく発展である

自然の歴史主義

永久的自然法則も歴史的である

絶対的普遍妥当性を持つのは運動だけである

物質＝存在　　存在論的概念（エンゲルス）

存在しているものは物質である

意識は物質の属性になってしまう

認識―主観と客観の分離

意識　　物質

物質　意識から独立した客観的実在性（レーニン）

／

認識論的概念

高次な運動形態は低次なものを含んでいる

低次なものは高次なものにそのまま妥当しない

物質の形態は運動を通じて認識されれる　P 344

／

運動の認識論的意義

内在主義　P 346

移行はそれ自体で行われる

一つの運動から次の運動形態が出てくるように、

一つの科学から他の科学が出てくる

思考と存在の同一性　P 370

結果においても一致する

理論的思考の（無条件的、無意識的）前提―ヘーゲルが発見

弁証法の規定　P 371

本書においては弁証法とは一切の運動の最も一般的な法則の学問である

ということにしておく

なぜなら自然の運動にも思考の法則にも妥当するという意味を含んでいるからである

美学（ヘーゲル）

歴史　　国家　市民社会―産業が規定する

精神的活動

国家の土台の上に絶対精神の三つの形態（上部構造）

絶対精神

美学（芸術）直観性

宗教　　神をたとえ話にしてしまう

哲学

類の概念

人間が本質上類である

社会
共同　具体的表現

----------第 12 回----------

弁証法を歴史主義として確立するが → フォイエルバッハ論

自然弁証法
反デューリング論 } → フォイエルバッハ論

フォイエルバッハ論 → マルクス主義の体系的な要約

●「ルートヴィッヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結」

序文　ドイツイデオロギーの刊行計画→マルクスが死んだため果たされなかった

ヘーゲルをいかに克服し分離したか

ヘーゲルに対するマルクス・エンゲルスの関係

ヘーゲル　　われわれ（マルクス・エンゲルス）

中間項（フォイエルバッハ）

第 1 節　ヘーゲル哲学から、いかに唯物論が発生したか

ドイツ哲学

カント→ヘーゲル→唯物論

フランスの哲学者（唯物論者）―国家から迫害された

ドイツの哲学者――――――――国定哲学（支配者の哲学）

この中に革命性を発見した人―ハイネ

ヘーゲルにおける革命性

法哲学の序文

理性
‖
現実性

現実を神聖化―反動的と批判
支配者から歓迎

弁証法的に理解されなければならない（マルクス）

ヘーゲル後

体系と方法が矛盾

保守的　　革命的（弁証法）

現実的なものは不合理となる←エンゲルス歴史主義

理性的なものは現実的となる

弁証法の前には、何らの絶対的なものは存在しない

あらゆるものが消滅するものであることを示す

生成と消滅以外に絶対的なものはない

保守的―相対的―体系
革命的―絶対的―弁証法
‖
絶対的歴史主義の立場
あらゆる固定化に対する絶えざる否定の立場―弁証法（エンゲルス）
岩波Ｐ21　すべての哲学において体系こそ求むべきものである
根拠―人間精神の不滅の要求から、
あらゆる矛盾を克服しようとする要求から生まれる（エンゲルス）
マルクス―対象が体系的であるから認識も体系的である
絶対的体系の否認（エンゲルス）
↓
体系的認識―全人類が発展のうちにできる
個人はできない
理論的思惟―経験的思考から区別されて、概念的思惟に基づく体系的思惟のことである
体系的把握の客観的必然性―問題

ヘーゲル学派の分裂―体系と方法の分裂
体系重視――保守派
方法重視――革命派―青年ヘーゲル派（マルクス含む）
宗教と国家の破壊が目的
ドイツでは、政治闘争は反宗教闘争として現れた
↙
フォイエルバッハ　唯物論を王座にのせた
ヘーゲル体系が打ち砕かれた
ヘーゲルを Aufheben しないで、投げ捨ててしまった
ヘーゲルの形式は破壊されるが、内容は救い出される（エンゲルス）

第２節　唯物論の特徴
哲学の根本命題
①思考と存在―どちらが根源的か
実体はどちらか
存在論的→一方を主とみると、他方が一方の属性になる
両者は対立しない

②思考と存在の同一性―認識論的
|
存在論と密接に関係している
哲学者の圧倒的多数によって肯定されている

ヘーゲルにおいては自明の理である

これを否認するものは不可知論者（カント）
二元論者（ヒューム）　である

実践 産業
実験

思考と存在の同一性を、どう解明するか

ヘーゲル　全世界をヘーゲルの諸法則から組み立てる

観念論的同一性

唯物論―反映論的同一性

汎神論―自然科学と産業の発展によって、観念論が唯物論を含むまでになる

観念論的に逆立ちさせられた唯物論

神は世界である―神学的無神論（フォイエルバッハ）

世界こそ神なり

逆立ち―論理的諸カテゴリーの先在

↓

創造者

上向法―現実を再生産する（マルクス）

現実の生産行為（エンゲルス）

唯物論における一般と特殊の区別

歴史的に現れた特殊なもの

世界観としての唯物論

フォイエルバッハはこれができなかった

18 世紀唯物論の欠陥
①機械論的→内在的に考察しないで外から考察する
②世界を過程として、不断の運動をする物質として
とらえられなかった

フォイエルバッハは 18 世紀唯物論を乗り越える立場にいる→三大発見

なぜフォイエルバッハは乗り越えられなかったか

「観念論」という言葉の間違った使い方
①理想を追求する立場―ヘーゲルが反駁している
②脳髄の力を言う（サルトル）
人間を動かすものは意識を通じて行われる
ある程度発達したものはみんな観念論となってしまう
③進歩の方向に動いているもの（善きもの）

欲―――唯物論
徳、善―観念論　俗物的

第３節　フォイエルバッハの宗教哲学への批判

社会の領域にくると観念論的で非歴史的となる

ヘーゲル―具体的状況の下でとらえる

フォイエルバッハ―キリスト教の代わりに唯物論的立場から真の宗教を立てる
愛に基づく現実的宗教→階級社会においては空論となってしまう
悪に対して認識が足りない
非歴史的見地
フォイエルバッハの抽象的人間から生きた人間に変えるには
人間を歴史の中でとらえればよい（マルクス）

第４節

青年ヘーゲル派
フォイエルバッハ　―異なる　マルクス＝ヘーゲルを本当に克服した
革命的側面に結びついた
弁証法
唯物論的 Aufheben

弁証法―外界と認識の運動の一般的諸法則に関する学―諸法則が弁証法ではない
ヘーゲルの弁証法―精神哲学と自然哲学を貫く
ヘーゲル弁証法は現実的運動の意識された反映―ひっくり返された
ヘーゲル弁証法を唯物論的に逆立ちさせる＝反映論的にとらえる
社会の中に唯物論の立場を徹底する―史的唯物論
従来の哲学から残るものがあるとすれば論理学と弁証法くらいである
自然哲学→自然科学
法哲学　→理論法学
歴史哲学→理論歴史学
実証科学
哲学が実証科学に解消される

論理学（形式論理学）―認識なしには成り立たない
存在論的前提―科学として残る根拠
形而上学―事物の学、収集の学―18 世紀までの科学
認識論的必然性
弁証法―整理の学、過程（process）の学―19 世紀
過程の研究の前には事物そのものが研究されなければならない

過程の学
連関の学　弁証法
歴史的学

三大発見によって自然において歴史性が明白になった
社会においても歴史の合法則的把握が明らかになるのが可能となった

社会の歴史
直接―個人の意欲された行為によって進行している
究極―諸個人の背後に、その行為をとらえる原因がある

人間の行為はすべて意識された行為―現象論的

この意識を生み出すものは何か

唯物論こそ、この観念の威力を保証する

この観念は実は原因ではなく結果である

政治、国家、宗教―イデオロギー闘争

原因―経済的要因

自然史と社会史の相違

意識性

社会の中には人間が主体として入っている

自然の中には人間は入っていない

社会認識は同時に主体認識である

社会認識は自分の属している階級的地位によって規定される

不利な認識
不利な発明 } を避けようとする

社会の中には主体が内在的に入っている

イデオロギーの土台への反作用―唯物史観に関する手紙（シュミットへの手紙）

土台と上部構造は単なる相互作用ではない―概念的把握ではない

土台が上部構造を規定する範囲内で上部構造からの反作用を認める

一般的関係

自由の能力―客観的力をつけて初めて言える

自由の力―獲得された客観的必然性
主体の力―獲得された客観的威力

電気屋

電気から自由

資本論　第２版のあとがき

対象の肯定的理解のうちに否定を見、必然的没落を認識する

歴史主義（資本論の基礎）―弁証法の一面

歴史主義の範囲内で総体性をとらえる（マルクス）―ヘーゲル弁証法の全面的継承

対象が一定の発展段階に至ると総体性になる

この前提なしには総体性の弁証法は使えない

「完成されたブルジョア社会においては、相互に措定し、

措定されたものが前提されたものであるとすれば・・・

歴史的に総体性となる。総体性となるということが歴史的の契機となる」

有機体一般に当てはまる―総体性（システムのとらえ方）

エンゲルスは体系の客観性を十分に基礎づけられなかった

対象が体系的に存在すれば、総体性の弁証法が適用できる

経済学批判　P 220

マルクスとエンゲルスの相違

1858　2/22 ラッサールへの手紙（マルクス）

経済学批判の叙述

学的に叙述される

経済学批判１分冊―総体的全体とならざるをえない

|

総体性を駆使している

歴史性の立場はとらない

1865　7/31　エンゲルスへの手紙

著書が芸術的全体となっている

辞典の編集的ではだめだ

1858　7/9　マルクスへの手紙

抽象的思考―学問的方法

＼無縁のものになっている　理解されない

1867　6/16　マルクスへの手紙

弁証法の成果が歴史的に叙述され吟味されればよい

歴史的方法で書くことができる

ヘーゲルのエンチクロペディのように小見出しでやってほしい

エンゲルスへの手紙

価値形態―忠告に従ったり従わなかったりした―弁証法的にふるまうために

（経済学批判への）書評

経済学批判は歴史的あるいは論理的に行われた

論理的取り扱いが適切であった

論理的方法―修正された歴史的方法

経済学批判序説

諸カテゴリーを歴史的に並べるのは誤りである

近代ブルジョア社会内部のしくみによって、並べられなければならない

これら両者は逆である

商人資本―高利貸し―産業資本

初めに産業資本を扱う、他の二つはそれの派性として扱われる

論理的なものと歴史的なものの一致は事情による

両者とも弁証法の本質を強調している

歴史性と総体性の関係

総体性を歴史性の中に、いかに位置づけるか

ブルジョア社会の内部の運動は、論理と歴史と一致する

ブルジョア社会の成立史の段階では、論理と歴史は一致しない

ブルジョア社会内部の歴史―具体的歴史

体系内歴史

事物の一定の発展段階において、つねに総体的である

総体性の弁証法を駆使する

ブルジョア社会は最も発展した歴史的組織である

前提

だから過去の生産諸関係の洞察を可能とする

総体性は相対的に理解すべきである

反デューリング論　国民文庫Ｐ32

体系的立場は弁証法の基本法則と矛盾する

経済学批判

ブルジョア社会のカテゴリーは過去の時代に対し真理性を持つとしても、限られた意味で理解されなければならない。最後の形態は過去の形態を一面的に把握する。

しかしそれによって次の歴史が行われる

総体性の弁証法を歴史性の中に相対的な契機として位置づける（マルクス）

否定の中に肯定をとらえる（ヘーゲル）
肯定の中に否定をとらえる（マルクス）　逆構造

実践的唯物論―現実は絶えず止揚していく

以上

（多田補足）

上記「弁証法講座」の講義内容は、結果的におよそ下記のようになった。

第１回　　弁証法・いかに把握すべきか

第２回　　ヘーゲル弁証法の三大要素（内在性、歴史性）

第３回　　ヘーゲル弁証法の三大要素（総体性）

第４回　　ヘーゲル弁証法の三大要素（総体性）

第５回　　ヘーゲル「精神現象学」

第６回　　ヘーゲル「精神現象学」「法哲学」「歴史哲学」

第７回　　ヘーゲル「歴史哲学」「大論理学（有論）」

第８回　　ヘーゲル「大論理学（本質論）」

第９回　　ヘーゲル「大論理学（概念論）」マルクス「経哲草稿」

第10回　マルクス「ドイツイデオロギー」エンゲルス「反デューリング論」

第11回　エンゲルス「自然弁証法」

第12回　エンゲルス「フォイエルバッハ論」その他